
光、願いし者

笠城夢斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光、願いし者

【Nコード】

N8087C

【作者名】

笠城夢斗

【あらすじ】

ある小国フローディアにて、双子のプリンセスがさらわれた！彼女たちの友人でもあり冒険者でもあるミカド・トモカズ・ケンがプリンセス救出に乗り出す

プロローグ―事の始まり―（前書き）

この小説は友人の現代舞台小説のキャラを異世界ファンタジー舞台に置き換えて書いたものです。そのためキャラの名前がファンタジーっぽくありません、ご了承ください。

プロローグ―事の始まり―

むかしむかし、と言うほど昔のお話ではありませんが、フロードイアと呼ばれる小さな国に、かわいい双子のプリンセスがおりました。

姉の名はカエデ、妹の名はモミジ。同じ両親から生まれ、同じ環境で同じように愛されて育った二人は、十七歳になったころには、そっくりにかわいらしい少女となりました。

やさしい風のふく春の日。今日も妹姫のモミジが姉姫カエデを外にひっぱってゆきます。

場所はお城の裏がわの森のそば。軽快に進む妹姫のうしろで、姉姫が石につまずいて転んでしまいました。

「きゃあつ」

すてん、ぺしょつ。じつにかわいい音を立てて、姉姫が地面につぶします。

「カエデ！」

前にいたモミジ姫はおどろいて振り向き、慌てて姉姫のそばにしゃがみこみました。お城の裏がわは森ばかりで兵士以外人が来ないので、あまり道が整えられていないのです。

「カエデ、大丈夫？」

心配そうにカエデ姫の顔をのぞきこむモミジ姫。

「うん……大丈夫」

カエデ姫はどうやら顔を地面にぶつけてしまったよう。かわいい姉姫の顔のあちこちにつく砂を、妹姫は手で払ってあげました。

それから、申し訳なさそうに姉姫に謝ります。

「ごめんね、歩くの早かった？」

「ううん、いいの」

カエデ姫は困ったような笑顔で言いました。「急がないと先生に見つかっちゃうし……」

二人は教育係の先生の目をぬけだしてきたのです。

妹姫の手を借りて、姉姫は立ち上がり服についた砂を払います。

モミジ姫はあたりを見渡しました。

「たしかこのあたりって聞いたのになあ……」

視線の先はお城ではなく、森。どうやら二人の目的は森にあるようです。

森の緑は風にふかれて、さわさわと鳴っています。

妹姫は、姉姫に言いました。

「カエデ、見分けられる？」

「ちよつと待つてね」

目のいいカエデ姫は少し目を細めて森を眺めていましたが、やがて「あ、あれ」と森の中の一点を指さしました。

「あれ、違うかな」

「あそこらへん？」

モミジ姫は声を弾ませて、森へ踏み込みました。

「気をつけて！」と心配そうな姉姫の声。けれどモミジ姫は小石につまずく姉姫と違い、背の高い雑草をも平気でかきわけてゆきます。足場はますます悪くなりましたが、一向に気にせずどんどん進んでゆきます。

やがて、モミジ姫は目を輝かせました。

「あつた！」

姉姫に聞こえるように声をあげ、目的のものへとまた一歩踏み込みました。

すると、なぜかドンツと障害物に当たりました。

「え あ、痛いっ！」

モミジ姫は悲鳴をあげました。腕を急に強くつかまれたのです。

「いけませんね、プリンセス」

と、だれかの声がしました。「お供もなしに、こんな所まで来ては」

だれ、と言いかけたモミジ姫の鼻を、甘い香りがくすぐりました。

モミジ姫の体から、すぐに力がぬけました。

「モミジ！」

森の外で見ていた姉姫が、青くなって金切り声で妹を呼びました。
“だれか”は妹姫の体をついで、にっこりと笑いました。

「ご心配なく、あなたも一緒にしますから。女性に寂しい思いはさせられませんからね」

『姫を返してほしくば、南第三遺跡へ来い』

これが、その日の夜にお城に届いた脅迫状でした。

第1話 プリンセスを探しに

フローディア国の城下町は、国の中心地としてとてもにぎわっています。

中でも酒場は、昼夜を問わずにぎやかです。この国には“冒険者”という職があるので 冒険者とは、つまるところ“何でも屋”ですが、

酒場はいくつかありますが、中でも大きい店が町の南側にありました。人気の元は、看板娘のハルミです。

と言っても彼女は、にこにこしながら酔っ払いオヤジたちのセクハラに耐える可憐な美少女 では、決してありません。

「ちよつと、どこ触ってるのよ!!」

怒声とともに平手を一発。これが彼女流のごあいさつ。

彼女に言わせると、「お盆で叩かれないだけマシと思ってよね」だそうです。

そんな彼女の裏表のなさときつぷのよさは信頼できるものでしたので、この酒場は特に冒険者に人気があります。交流と情報の広いハルミに仕事さがしを依頼する人間は、少なくありません。

そんな冒険者たちの中に、トモカズとケンという二人の若き戦士がおりました。

「ハルミイ。なんか面白い話ねえか」

今日もトモカズが、テーブルの一つにだらけた様子でつつぷして、退屈そうな声を看板娘に向けています。

ハルミは顔をしかめて、「シャキツとしなさい!」と怒ります。

「うつせえな。退屈なんだから仕方ねえだろ何とかしろよ!」

「本当に何かしたいならスクールのコズエ先生のところ行ってお手伝いでもしてきなさいよ。あんたならいつでも歓迎してくれるわよ」

「げえっ冗談じゃねえぞ! また意味もなく大量の荷物運びとかやんのかよってゆーか俺は冒険者でしかも一級だぞ、何が悲しくても

う卒業したスクールに生徒のための荷物運びなんかしに行かなきゃならんだ!？」

「コズエ先生に愛されてるから」

「ちーがーうーだーろー!!!」

平然と答を返してくるハルミの前で、トモカズは悔しげにどんどんとテーブルを叩きます。

「ちょっと、テーブルが壊れるでしょこの馬鹿力!」

「だったら人をからかって遊んでねーでちゃんとした仕事をつ」

「ちゃんとした仕事じゃないのあんたが暇そうならスクールに来るように言つといてくれてコズエ先生に頼まれてるんだから」

「俺は暇じゃねえ!」

「退屈だつて言つたじゃない」

「だからってその暇はあの先生のために費やすためにあるんじゃない?」

「とか言いながらつい三日前荷物運びやつたんでしょ、スクールで」

トモカズは顔を真っ赤にしました。なんでお前が知ってるんだよ、とどこか勢いをなくしながらハルミをにらみます。

「私は情報屋なんだから」

とハルミは胸をはりました。その隣で、くすくすと笑い声。

酒場の小さなテーブルを、トモカズと挟むようにして座っている少年。すらりとした長身を椅子に預けリラックスした体勢のまま、おかしそうに笑っています。全体的に色素が薄く、トモカズやハルミとはやや違った雰囲気を見せる彼は、それもそのはず、異国の血が混じっているのです。

トモカズは端正な顔立ちの友人　実は同い年です　の顔を見て、悟りました。

「ケン!　お前チクリやがったな!」

バン!　と大げさにもテーブルに両手を打ちつけながら立ち上がるトモカズ。どうやらスクールに行ったことがバレていたことが、

よほど恥ずかしいようです。

対してケンと呼ばれた少年　　本名はケインなのですが　　は、
涼しい顔で言いました。

「人聞きの悪い。オレはいつだってハルミの仕事の協力者であるようにしているんだ」

と、隣に立つハルミを見て微笑みます。それはそれは甘い笑顔。
こんな笑みを向けられて、頬を赤らめない女性はいません。単に見
てるだけで恥ずかしいからだ、とはトモカズの弁ですが。

しかしハルミの反応はちょっと違います。なぜなら、慣れている
からです。

何と言っても“この世で尊敬すべきは女性以外にない”と公言し
てはばからないフェミニスト・ケンの中で、さらに特別扱いされて
いる唯一の娘なのですから。

「そーよ。ケンはいつだってこっちの味方だもの」

そう言って、彼女もケンに微笑み返します。トモカズはわめきま
した。

「ケン！　お前男の友情と恋人とどっちが大切なんだよ！」

言ってから、失言を悟って絶句。ケンはますますにつこりして、
言いました。

「……どちらが大切だと言って欲しい？」

「そうねえ。友情と愛情を比べるなんて邪道よねえ。ケンだって、
決められっこないわよね」

「ああでも、大切なトモカズがどうしてもって言うなら、オレも心
を鬼にしようかな。そうすると大切な何かを失いそうな気がするな
とは言えお前は望んでいるんだな。さてどうしたものかな」

「……いい……もう……いいから……俺が悪かったから……」

トモカズはぐったりと、もう一度テーブルにつつぶしました。ス
クール時代の同級生であるこの友人たちは、一人一人でも手ごわい
のに、タッグを組むとそれはもう恐ろしいことになるのだと、彼は
たった今思い出したのでした。うかつです。

彼らの周囲では、昼間から酒場に入り浸っている暇な冒険者たちがくすくす笑っています。看板娘ハルミと、一級冒険者として国に認められているトモカズ、ケンのやりとりは、すでにこの酒場の名物なのでした。

相変わらず仲のいい笑みを交わすハルミとケン。その前でぐつたりとするトモカズ。なんとも平和ないつも通りの光景

と、そこへお店の裏へ行っていたマスターが、お店の中へ戻ってきて言いました。

「ハルミ、客だ」

「私ですか？」

振り向いたハルミに、頑丈親父マスターは無言で自分が入ってきたお店の裏口に親指を向けます。

ハルミは少し眉根を寄せてから、トモカズとケンに詫びを入れ、裏口に向かいました。

裏口から彼女を呼ぶ客と言えば……そんなに種類は多くありません。

「久しぶりだな、ハルミ」

そこには、いかにも普段着を装っているながら明らかに上流階級的な仕立てのよい服を着た、体格のいい男。

ハルミは裏口の戸を閉め、肩をすくめました。

「センセ、身分を隠したいなら徹底的に平民服を着た方がいいと思うんだけど」

「分かっている。今回は急ぎすぎて頭が回らなかったんだ」

と男は苦笑しました。この男性はアサカワと言い、スクールの教師です。担当は体育ですが、その縁でお城の兵士の基礎訓練指導を任されたりもして、お城とのつながりがある数少ない人間です。

兵士の訓練を任されるだけあって、だてな教師ではありません。いつも堂々と、悠然としたこの教師が“急ぎすぎた”こととは何なのか。ハルミは気を引きしめました。

アサカワは声のトーンをぐっと落としました。姿勢は決して内緒

話ではないようにしながら 声は決して他にもれないように。

「……プリンセスがさらわれた」

ハルミは一瞬、その言葉が理解できませんでした。彼女の様子を察し、アサカワはもう一度くりかえしました。

「さらわれたんだ。カエデ姫とモミジ姫が」

「――」

……二度もくりかえされてまだ否定するほど……あいにく、ハルミは理解の遅い人間ではありませんでした。若いながら情報屋としての地位を確立している彼女は、嘘冗談の類をすべて見抜く自信があつたのです。

アサカワは嘘をついていません。だからこそ、ハルミにはショックでした。この国のシンボルである双子姫は……スクール時代からの、ハルミの友達なのです。

アサカワはそれを知っています。だから彼は、ハルミに落ち込む暇を与えませんでした。

「誰か腕のいい者を紹介してくれ。これを世間に公表すれば国民が動揺する……できるだけ内密に、すみやかに解決できる者を」と、城からのお達しなんだ」

その言葉に一瞬腹を立てかけたハルミは、すぐに力をぬきました。アサカワは悪くありません。城の命令も、間違っていないせん。

友達である姫を、救う人間を自分が推薦する

ハルミは、迷いませんでした。

「……ちょうど今酒場の中で、暇そうにしてます、一級冒険者が」アサカワは眉を寄せました。一級という称号は、かなりの功績をあげた冒険者に城の軍隊が与えるものです。なぜ軍隊かと言えば、冒険者というのは元々は傭兵が始めたからなのですが。なんにせよ、それほど信頼できる称号ですから、それを与えられたような者が“暇そうに”などしているはずがないのです。

そしてアサカワは知っていました。そんな例外的な“一級冒険者”を。

「あの二人か……。ケインはいいんだが、トモカズがな……」

「腕は確かですよ」

ハルミは断言しました。それから、ゆっくりとつけたしました。

「……あの二人にとっても、プリンセスは友達ですからね」

「マジかよ？」

酒場の裏ですべてを聞かされたトモカズの第一声は、それでした。

「……マジかよ」

二度くりかえします。しかし誰も否定してくれなければ、笑い飛ばしてもくれません。

「城はちゃんと護衛していなかったんですか」

ケンが腕組みをしたまま、アサカワに目をやります。アサカワは苦い顔で言いました。

「……今回は……姫君たちが、あのタカミヤ先生の目を盗んでまで外へ行ったからな。あの先生の目を盗めたんだ。兵士たちもついていけなかったんだろう……」

「今、タカミヤ先生は？」

「聞くまでもないだろう？」

アサカワの苦笑に、元生徒たちは無言でうなずきました。タカミヤ先生はやはり元スクールの教師で、今は双子プリンセスの教育係です。女性ですが、怒らせると生半可な兵士では太刀打ちできません。今回の騒動ではさぞかし兵士たちはしぼられているでしょう。そしてもちろん、一番苦しんでいるのはタカミヤ先生なのでしょう。

「……絶対、見つけ出す。二人を」

こぶしをかためて、トモカズが低く呟きました。常に一緒に仕事をしているケンも、何も言いませんでした。

「でも……“南第三遺跡”って……まだほとんど手が入っていないくて、危険区域に指定されてるのよね。二人とも大丈夫？」

ハルミはアサカワが持ってきた、プリンセス誘拐犯の手紙を見つめて言いました。

『姫を返してほしくば、南第三遺跡へ来い』

それ以外何も書かれていません。犯人の目的が、何もないのです。「南第三か……。あそこはモンスターが出るんだ。だから調査が遅れてるらしいな」

ケンがハルミを見やります。ハルミはうなずきました。

「レイヤくんが、一度調査隊の護衛を引き受けて入ったのよ。だけど、失敗したって」

「げ、レイヤのやつが？」

トモカズがぞっとしたように表情を引きつらせました。「それってよほどのことじゃねえか？ あいつが失敗なんて」

「あとでレイヤ本人に詳しく聞きに行こう。 トモカズ」

ケンは意味ありげに友人に視線をやりました。

「分あってるよ。俺たち二人じゃ無理だ」

トモカズは無然として返し、それからニヤリと笑いました。

「あいつ、呼びに行こうぜ。どうせこんな話聞いちゃ、嫌とは言えねえんだからな」

第2話 最強のパーティ

フローディアの国には、唯一神をまつる教会があります。

そこで洗礼をうけた聖職者たちは皆、神の力を借りて癒しの力を発揮することができます。それは確かな力でしたので、洗礼をうけずとも、神を信じる者は国には当たり前にいるのでした。

そんな中、めったに“神を信じる”と口に出さない人間といえば、人間自身の治癒力を高めるために働く医者や薬師です。彼らにしてみれば、神を信じた瞬間に自分の仕事の意味がなくなるのですから、それは当たり前のことです。

城下町の片隅にある一軒の民家。

そこで今まさに、神の奇跡が起きようとしていました。

「……おお我が神よ。聖なる母よ……」

子供部屋。青ざめた親たちがさがるような目で見守る中、大司教と呼ばれる老人が祈りを捧げていました。

「……天の光となりて我らを照らし、大地のぬくもりとなりて我らを守るその偉大なる力、このいとし子に恵みたまえ……」

老司教の前に、ベッドに寝かされたままの子供。何かの病気にかったのでしょうか、ひどくやせ細り顔色に生気がありません。

目を開かないその幼子の、弱々しい体……

「……恵みたまえ……」

老司教の声に導かれるように。ふわりと、やわらかな光がどこからともなくさしこんで、今にも消え入りそうな小さな命を包みました。

まさしく天の光であり、大地のように暖かいその光の中で……

やがて、幼子がゆつくりと、そのまぶたを開けました。

「……！」

かたわらで見守っていた両親の、声にならない喜びが部屋を満たしました。

幼い体を抱いた淡い光がやがて空気にまぎれるように消えてしま
うと、老司教は両親のほうを振り返り、ゆっくりとうなずきました。
その温和な瞳が、やさしく微笑んでいます

親たちは、せきをきったように我が子を抱きしめ、泣き出しまし
た。

「……感謝いたします。我が聖母よ……」

親子を眺め、奇跡を起こした神に感謝の祈りを捧げる老司教。

小さなその部屋の片隅で、そんな様子をじっと見つめている
一人の少年がおりました。

十代半ばを、幾ばくか過ぎたくらいでしょうか。短い黒髪に、黒
縁の眼鏡。右の手首には洗礼を受けた証である金の腕輪をしていま
す。着ているものも白が基調の僧侶用ローブクレリックのようですが、“慈愛”
をむねとする僧侶にしては、身にまとう雰囲気やや冷ややかな
少年です。なまじ顔立ちが綺麗なだけに、なおさら人を寄せ付けま
せん。

「……………」

何を考えているのかまるで分からない無表情で、奇跡の現場を見
つめていた少年。

感動の場面がひとしきりすむと、老司教が少年のほうを見て言い
ました。

「さて、ミカド。もう済んだようだ……帰ろうか」

「はい」

簡潔に一言返事をする、少年はすみやかに部屋の戸口まで動き、
ドアを開けました。自分は部屋から出ずに、老司教を待ちます。

足音をたてない不思議な動きで、司教が戸口に向かいます。

「あのっ……ありがとうございます！」

泣きぬれた顔をあげて、両親が精一杯の言葉を投げかけます。

司教は、微笑んで返しました。

「わたしの力ではありませんよ……神に、感謝を」

親たちは、深く深く頭を下げました。

「どうだったかな？ 今日……」

神の奇跡を起こし、教会へ帰る道すがら、ふいに老司教が隣を歩くミカドに訊きました。

「……いつもどおりだと思いますが」

そっけないとも言える声音で、少年が答えます。司教はその答に、満足そうに目を細めました。

「これで、お前が祈りを見たのは何回目になったかな？」

「八回目です」

「そろそろ、お前の目的は果たされつつあるか……？」

足をとめて、司教は柔和な表情でミカドを見つめました。

ミカドはしばらく口を開きませんでした。眼鏡の奥の、鋭い光をおびた瞳が、何を思ったのか思案の色を見せ

やがて、ゆっくりと彼は答えました。

「……分かりません」

「そうか」

司教はうなずき、再び前を向きました。

太陽がちょうど中天を飾る時間。往來は人の気配でいっぱいでしたが、二人が歩むのに困ることはありませんでした。

人々は老司教の姿を見て、みずから道をあけるのです。目の前を通り過ぎていく神の使いを、拝むように何度も頭をさげながら。【

一改ページ】

ただし、その視線はもっぱら老司教にのみそそがれていました。

隣を歩くミカドも、誰もがありがたがる白のローブを着ているというのに、むしろ無視されているような気配がありました。

教会は、城下町でもっとも目立つ建物の一つです。太陽に映える背の高いそれが、だんだん二人の視界に大きく迫ってきます。

教会の周囲は神聖な地とされるため、むしろ人通りがほとんどなくなります。二人の歩みはさらにはやくなりました。

と。ふと、ミカドが足をとめました。

「どうした？」

司教の言葉には答えず、ミカドは油断なくあたりに視線を走らせました。

あたりに変化はありません。少なくとも、司教の目にはそう映っていました。けれど

「……動かないでください」

司教に向かって冷静にそう言葉を紡ぎ、それからミカドは目を閉じました。何か見えないものを、感じとろうとするかのように。

そして。

「来ます！」

空気がざわめきました。気流が発生し、何もない空中の一点に集束していきます。

次の瞬間には、

ごばっ！！

と何かをぶち破るような音とともに、空中から黒い影が飛び出してきました。

人間の大きさの二倍ほどもある、巨大な黒カラス

モンスター

人間や動物とはまた生態を異にする、魔物と呼ばれる生き物です。手を伸ばしても届かないぎりぎりの位置に留まり。巨大な翼を大きく広げたまま、黒鳥はくちばしを開きました。

ごっ！！

そのくちばしの奥から吐き出されたのは、こともあろうに炎の渦でした。

狙いはミカド。少年は予測していたかのように、あっさりと炎をかわします。

司教から離れるように動く彼を、巨大鳥は再度炎で狙います。

ミカドは小さく何かを唱えていました。

愚かなるものに操られし炎。己の身にかえれ！

何かが、ミカドの体内で力となりました。言の葉にのせ、発現します

瞬間、カラスの吐き出した炎が逆流しました。

くきええええええっ！！

微妙にカラスとは違う奇声を上げながら、巨大鳥は自分の炎にまかれます。人間一人は消し炭になりそうな炎です。並大抵のもでは耐えられるはずはありません

が。

くきええええええっ！！

再び奇声を発しながら、黒鳥は体にまとわりつく炎を四散させました。

羽毛はかなり焼け焦げ、一部肌が露出して不気味になりましたが、巨大鳥自体はまだまだ動けるようです。

「ちっ
」

舌打ちし、ミカドはすばやく司教のいる位置を確認してから、再び言の葉を紡ぎました。

求めるは刃。切り裂け
！

ばしゅっ！

見えない力があたりの空気を動かし、一本の真空の刃となってもンスターを襲います。

どす黒い色の血が舞い散りました。どさりっ！と重い音がして、巨大鳥の黒い大きな翼が一枚地面に落ちました。しかし

「なんと
」

司教が驚愕の声を上げるのを、ミカドは聞きました。

翼を一枚失っても、巨大なカラスははまだ空中にただよっていました。

もつとも、ミカドは驚きませんでした。なぜなら、この鳥のよくな生き物はさきほどから翼を一度もはためかせないまま、空中に浮かんでいたのですから。翼を片方なくしてもバランスを失わないあたり、あの翼は完全に飾りもののようです。

巨大ガラスがくちばしを開きました。のどの奥に、炎の先端が見え、それを吐き出すと同時、残された一枚の翼が大きくはためき

ました。

生み出された風。それにあおられて、予測不可能な動きとなった炎が舞い踊り少年に襲いかかります。

荒れ狂うものを眠らせん。消し去れ　　！

叫びながら、ミカドは身を伏せました。

なんとも形容しがたい音が耳を貫き、あたりを支配していた熱が一気に冷めていきます。ミカドが体勢を整えたところには、狂った炎は消えていました。

黒鳥は、なおもくちばしを開こうとしていました。

炎に包まれた余韻でじっと汗ばむ頬を拭い、ミカドも言の葉を紡ぎかけました。黒鳥を地に落とすために。

大地に潜みし、すべてを

けれど、ふと言葉を切りました。

彼の目には、新たな人影が映っていました。巨大鳥の向こうから、猛然とこちらへ駆けてくる見知った姿が。

「　　つてえええあああああ！」

人影は、常人とは思えない跳躍力でジャンプし、力任せに手にした剣をふるいました。ずしゃっ！　と鈍い音がして、巨大鳥の残されたもう一枚の翼を根元から叩き斬ります。

衝撃にバランスを失ったのか、巨大鳥は悲鳴とともに地面に落ちました。

最後の翼を落とした人物は、すかさずモンスターの本体にその大剣をつきたてました。容赦がありません。そうしなくては、こちらの身が危ないのですから。

けれどまともに体を貫かれても、巨大な黒い鳥はまだ生きていました。地面にぬいとめられた身をよじり、そしてふいにものすごい勢いをもってその大きなくちばしを、大剣の持ち主に向かって突進させます

「！！！」

剣を鳥から抜くことができず、剣の柄を握ったまま狙われた人物

が体を硬直させたその時

がきんっ！

巨大なくちばしを、まっすぐ飛んできた新たな剣が貫き、砕きました。

モンスターの動きに乱れが出ました。すかさず、その本体を地面にぬいとめていた人物が、刺さったままの大剣を力任せにねじりました。

断末魔の悲鳴

全身をけいれんさせたあと、とうとうモンスターは息絶えました。黒い体がちりとなって消えるまで、大剣は抜かれませんでした。その大剣が鞘におさめられた時、その場にはもう一人人間が増えていました。

「トモカズ。お前は本当に危なっかしいな」

ため息をつきながら、最後にやってきた少年　ケンが、さきほどモンスターのくちばしを砕いた剣を　つまり彼の剣です　拾い上げます。

「うっせ。こんなにしぶといとは思わなかったんだよ」

大剣を鞘におさめきつて、トモカズが口をとがらせました。

「そういう勝手な予測が命取りになるんだ。お前、何度死にかけたか分かってるか？」

「生きてるからいーんだよ！　ってかお前だってな、ぜってーに先につっこまねーじゃねーか！　俺にばっか先行かせて」

「それはお前が好きでやってるんじゃないやなかったのか？」

「お前だって止めたことねーだろーが！」

「まあ、明確な理由なら出せそうだけどな。なあミカド？」

ケンは黙って見ていたミカドに話をふりました。ミカドの冷やかな目とケンのいたずらっぽい目が見交わされ

「何が言いたいんだよお前ら！」

わめくトモカズに、二人は即答しました。

『君子危うきに近寄らず』

トモカズ、撃沈。

そんな三人の少年の様子を、すっかり存在がなくなった大司教が苦笑しながら眺めていました。

教会にたどりつくと、ミカドはまず大司教には先に教会に入ってもらい、自分は入り口にとどまりました。

司教の気配が完全になくなるのを待って

おもむろに、低くつぶやきます。

「……それで、何の用だ」

そつけない言葉。背後から返ってきたのは、「ごあいさつだな」と苦笑するような声。彼は振り向きました。

そこに、さきほどからついてきている二人の友人がいました。

あんな場面にタイミングよくやってきたトモカズとケン。彼らはミカドをさがしていたようですが、その理由を明かそうともしませんでした。司教の目を気にしてのことなのは、ミカドも分かっていたのですが

「さっきのあれは何だったんだろうな？ ミカド」

と、まず言ってきたのはケン。

けれどミカドは返事をする前に、ケンの隣にいるもう一人に目をやりました。ミカドの鋭い視線を受けて、トモカズがなんとも微妙な笑みを浮かべます。

それを不審に思っ て いつものトモカズなら「久しぶりに会いに来てやったのになんだよその態度は！」と怒声が飛ぶはずですが、ミカドは、視線でケンに問いかけました。こういう時はトモカズよりケンが確実だということは、彼の中ではたしかな認識のようです。

ケンは答えを出す前に、もう一度ミカドに訊きました。

「何だったんだろうな？」

「……誰かが送り込んできた」

「送り込んできた？　つまり野性じゃないんだな」

「あんな現れ方をする野性モンスターはいない。おまけにあれの狙いはあからさまだった」

「……それはつまり」

「挑発だ。間違いなく俺に対する」

そう言って、ミカドはすっと目を細めました。

「いやな予感がする」

ケンは口をつぐみました。人の中にも、野性のモンスターをなんらかの形で操るような者がいます。その場合のモンスターは、もはや“野性”とは呼びません。

「そんなことより」

お前たちの用はなんだ　ミカドは冷めた目つきで二人の友人を見えます。

ケンはため息をつき、まず「落ち着いて聞けよ」と言いました。ただでさえ愛想の悪いミカドの整った顔立ちが、不愉快そうにゆがめられました。彼は不機嫌を隠そうとする人ではありません。

けれど……不機嫌であろうとも、頭から拒絶することはありません。

ケンはミカドの目を見つめて、ゆつくりと言いました。

「……モミジたちがさらわれたらしい。双子プリンセスが揃って」

「……なに？」

ミカドの声音に、陰がまじます。ケンはこちらでも少し表情をゆがめて、「二度も言わせる気か？」と言いました。

「……誰だ、犯人は」

「分かってたら世話はない」

言って、犯人の手紙をミカドに渡します。第三遺跡に来いというそれを眺めるミカドの目は、とても冷たいものでした。ケンは説明を加えました。

「救出のための人材を城がハルミに求めて……ハルミはオレたちを推薦したんだ。だから」

「来るよな」

トモカズが力強くミカドに言いました。「来るよな？ 第三遺跡は、俺たちだけじゃ厄介なんだ。絶対にお前がいるんだよ。そのことがなくても……来るよな」

「……………」

ミカドは無言で、手紙をケンにつき返しました。それは傍から見れば、拒絶にも見えました。

けれど、三人はもう数年越しの親友なのです。トモカズたちは確信していました、ミカドが拒むはずがないことを。

なぜなら……さらわれたプリンセスのうち妹姫モミジは、まぎれもない、ミカドの恋人なのですから。

「今すぐにでも行動を起こすからな」

ケンは言いました。「まっさきに遺跡に向かうようなことはしないが。犯人の要請には時間の指定がない……これも意味がよく分からないが、急ぐべきなのは確かだろう？」

「……………」

「来いよ！ 俺たちここで待つてるからな」

真剣な友人たちの視線を受けて

ミカドはふいに、彼らに背を向けました。何も言わず教会の扉を開け、何もなかったかのようにその中に姿を消してしまいます。

残った二人は、呼び止めませんでした。

ただ無言で、待ちました。

そして

やがて、再び教会の扉が開き。

「……まずは、どこへ行くんだ」

クレリック

ウイザードローブ

姿を現した少年は、僧侶用ではなく、魔術士用職服を着こんだいでたちで、開口一番、そっけなく。

ケンとトモカズは、目を見交わして微笑しました。

フローディア国でも指折りの冒険者パーティが、メンバーを揃えた瞬間でした。

第3話 黒の聖職者と白の魔術師

ぴちゃん……ぴちゃん……

「ん……冷たいっ……」

頬にしずくが落ちる気配に、モミジ姫は目を覚ましました。

「……………」

しばらくぼんやりと、見えるものを見つめます。そして　そこに見える人物が誰かに気づき、はっと起き上がろうとしました。

「カエデ！」

けれど、すぐに体が動かないことに気づきます。ロープできつく縛られていて、無造作に地面に転がされているのです。ロープの縛りかたはとても巧みで、動かなければ痛くはありませんが、どうやっても立つことはできません。

すこし離れた位置に、モミジ姫と同じようなかつこうでカエデ姫も転がされていました。モミジ姫が何度も名を呼ぶと、うつすらと目をあけて、

「…………モミジ…………？」

とかすれた声で妹の名をつぶやきます。

「カエデ！　大丈夫？　どこもへんなところない？」

自分の状態はすっかり頭になく、モミジ姫はただ姉姫を心配します。もともと、体が弱いのはカエデ姫のほうです。

「だ、大　丈夫。ちよつと……ロープが痛いけど……」

姉姫は弱々しく微笑んで、それから顔を巡らせました。天井のほうへ。

天井は、土のようでした。ときどきパラリと砂が落ちてきます。少し視線をずらすと、壁も土のようです。ようするに二人は洞穴のような場所にいるのです。

「どこ…………ここ？　なんで土壁なのに崩れないの…………？」

カエデ姫がぞつとしたようにつぶやきます。「ぜ、全体が土だな

んて……粘土だとしても、こんな不安定な」

「ねえカエデ」

モミジ姫は口をはさみました。「ほら。……燭台があるの。ろうそくが……火が、ともってる」

そう、だからこそ周囲の様子が分かるのです。

二人は地面に転がっているの、その場所の広さがいまいちよく分かりません。けれど、そう狭くはありません。そんな部屋の中をどうやら、たった一本のろうそくが……照らしきっているのです。

「普通のろうそくじゃない……」

束縛された体を無理やり動かし、自分の目でそれをたしかめたカエデ姫。離れた場所にいる姉姫の顔色がひどく青白く見えて、モミジ姫は再度声をあげました。

「カエデ……気分とか、悪いんじゃないの？」

「え？ あ……」

言われて初めて気がついたかのように。姉姫は表情をゆがめました。

「……ここ、空気が悪いの……モミジこそ平気なの？」

「……」

モミジ姫も口をつぐみました。姉姫の言っていることは、本当でした。なぜ今の今まで自覚していなかったのかと言えば、混乱していたことと……

今の状況は気持ち悪いことだらけだったので、“気持ち悪い”ことがかえって分からなかったのです。

意識してみれば、空気はもとより周囲の土の暗い黄土色も、自分が転がされている地面のしめり気も、すべてぞっとするほど心地悪いものばかりです。

カエデ姫が、不安気に問いを口にしました。

「一体どこなのここは？ 誰が」

言いかけて、口をつぐみます。

「カエデ？」

「……あの　ひと　どこかで……」

いけませんね、プリンセス。お供もなしに、こんな所まで来ては……

森の木々のかげになつて、よく見えなかった姿。声もひどく遠く感じました。だいいち声を少し作り変えることなど、不可能なことではありません。

けれど胸にひっかかつて、カエデ姫は顔をくもらせました。

不安気にその様子を見ていたモミジ姫は、ふと姉姫の向こう側に目をやって

呆然と、つぶやきました。

「　なに、あれ……」

そこに天井につくほどに積みあがった山　ろうそくのやや暗い明かりの中で、いままで壁のように思っていました。よく見れば色がぜんぜん違います。きらきらと、こんな場所には明らかに合わない黄金色

「……金？」

ぴちゅん……

静かすぎる洞穴に、モミジ姫のつぶやきとしずくの音が、不気味に響きました。

*

「南第三遺跡？」

話を聞いて、ウィザード魔術士レイヤは小馬鹿にしたように唇の端をあげました。

「へえ。君らしい命知らずな話じゃないか？」

「てめーも失敗したんだろうがっ！」

トモカズが顔を真っ赤にして、スクールでの同級生につかみかかります。けれどレイヤは余裕の表情を崩しません。

「失敗したよ。だから、君らは命知らずと言っているんだ」

インテリ風の銀縁眼鏡の位置をなおし、当たり前のことのように言います。トモカズがさらに罵声をあげようとしたが、

「それはつまり」

それより先に、ミカドの冷やかな言葉がつむがれました。

「お前にできなかったことが、俺たちにできるわけがない、と言いたいわけか」

「さすが理解が早いね。ダークプリーストさん？」

につこりと、ミカドに笑みを向けるレイヤ。

二人の間に見えない火花が散ります。

普段は無愛想なほどに他人とかかわりを持つとうとしないミカドにとつて、唯一の例外がこの目の前の少年です。

ウィザードローブ

ミカドとレイヤ。二人はともに、魔術士用職服と呼ばれるスタイルをしていました。“魔力”と呼ばれる力を操る人間のために、魔力と相性のいい金や銀の糸によるししゅうがほどこされたマントと服。とくにレイヤは、護符と呼ばれる宝石の類をそのローブにたくさんあしらっています。決して派手には見えないのは、服職人のセンスのよさでしょうか。

二人の決定的な違いは、ミカドがやはり魔力と相性のいい黒基調のローブであるということ、

そして対するレイヤは、ウィザードにはきわめて珍しい 白のローブを着ているということでした。

いわく、“黒は体質的に合わないんだ”。そんな彼についた二つ名は、

ホワイトウィザード

「“白の魔術士”さん」

ケンが横から、軽く口をはさみます。「自分の部屋を壊したくなかったら、ミカドをあまり刺激しないでくれないか」

「おやおや。人の家で魔術ぶっぱなすほど君らの仲間は非常識だっ

たかい？」

「言っちゃあなんだけどな。この国でミカド以上に“非常識”はいないんだ」

「ケン」

ミカドが顔をしかめて友人に見やります。ケンは苦笑して、肩をすくめました。

「 自覚してるだろう、ミカド？」

「……。今更つべこ言われるいわれはない」

ミカドの右手首に、金でできた腕輪がはめられています。まぎれもなく、僧侶として洗礼をうけた証です。

クレリックは普通、黒を嫌います。だからこそ、教会以外の場所ではウィザードの黒服を着る彼を、人はこう呼ぶのでした。

「ダークリスト 黒の聖職者」と。

「ミカドは人の家壊すほど馬鹿じゃねえよ」

トモカズが、ぶっきらぼうに言い捨てます。

四人がいるのは、レイヤの自室。他に人がいないところを選んだらこうなったのです。屋敷の二階にあり、一人部屋とは思えないほどの広さがあります。

というのも、彼の家は国でも指折りの宿を営む“ホテル お金持ち”なのです。加えて、冒険者としての彼自身の稼ぎも、十七歳というその若さを考えれば並ではありません。

「そう、馬鹿じゃないことを願うね」

レイヤは自分の机に手をかけながら、微笑みました。「再建費も馬鹿にならないからな。で、話を戻すと君らは命知らずにも、南第三遺跡に行こうというわけだ」

「ああ」

「理由は？」

「秘密事項だ。冒険者への依頼だからな」
「なるほどね」

机にもたれて、レイヤは三人を見比べます。「で、君らは僕に何

が聞きたいんだい？」

「あの遺跡は、そもそも何なんだ？」

とケン。それを聞いて、白の魔術士はくすくすと笑います。

「それが分からないから、調査隊が入るんだろっ？」

「……で、結果は」

「何も分からなかったから、失敗って言うのさ」

「……失敗したことを、隠そうとしねえんだな」

トモカズがいぶかります。

失敗。その言葉は冒険者にとって、時には致命的な汚点となります。たしかに失敗した事実^{事実}は隠すのが難しいものですが、あれこれ理屈づけ 言い訳をして「だから失敗とは言わない」という人間が多いのです。

レイヤは平然と、トモカズに返します。

「冒険者の汚点だとか、そういう問題を通り越しているんだよ。な^んせ僕が仕事をこなしきれなかった場所だからな」

こともなげにそんなことを言う魔術士の胸には、ケンやトモカズと同じ、一級と認められた冒険者に与えられる勲章。

「だから、あの遺跡 ほとんど洞窟^{ほんとどう}だけど、危険区域にも指定されて、みごとに調査がとまってる。あそこに入ろうなんて考える冒険者はほとんどいなくなったからね」

「いつちいちム力つく野郎だ^なてめーは……」

トモカズが険悪^{けんあく}にうめきました。しかし殴りかかることはしませんでした。レイヤの言葉を否定できないからです。

「僕は遺跡のある場所で、ある敵に邪魔されてそれ以上先に進めなかった」

ひとりカッカしているトモカズを完全に無視し、レイヤは続けました。そしてふと言葉をきり、三人の顔を見てから、

やがてくすつと笑い、再度口を開きました。

「まあ、スクール時代の同級のよしみだね。 王立図書館のほう^{ほう}に行ってみるといい。君らの友達の、彼女のところに」

「ミサオか？」

「そう。僕がああ遺跡でとったデータはすべて彼女に預けた。もちろん本当は、企業秘密なんだよ　なんせあれも冒険者への依頼だったんだから」

「いたずらっぽく言って、それから最後にレイヤは、明るい口調でつけたしました。」

「僕が協力できるのはそれだけだね。　健闘を祈るよ、非常識なパーティさん」

第4話 王立図書館にて（前書き）

遅れてすみません（汗

第4話 王立図書館にて

城下町でもっとも大きな建物というなら、それは王立図書館に他なりません。

小国フローディアの抱える、大陸全土一を誇る図書館。あらゆる地域からの蔵書が集まっています。

もともとフローディア付近は大陸でも“伝統の地”と呼ばれ、まだ調査の終わらぬ古い遺跡、洞窟がたくさんあるのです。そのために、学者や発掘者がこの国に集まり、それにもなつて蔵書も増えたのでした。

王立、と名がついていますが、現在その管理は王家の遠縁のある血筋に任せられています。

その血筋の末裔、現管理人の娘であるミサ才は、管理人室にひとりでひきこもり、あるデータを他の本と照合していました。

ショートカットのつややかな黒髪。それにも負けず深い魅力をもつ黒い瞳を、じつと書類に向けています。その目つきは冷静で涼しげ、まさに“知的”と呼ぶにふさわしい美貌をもつ少女です。

机に山積みされた本を一冊一冊調べていき、ときおり書類のほうに視線を落としては、再び本をめくっていきます。

そして、

「これだわ……」

何冊目かにさがしていた情報を見出し、ほっと一息と。

ふぉん……

彼女以外誰もいない管理人室の床に、ふしぎな紋様が浮かび上がりました。

「魔方阵……」

ミサ才は冷静につぶやきました。赤く光るその陣の中に、影が三つ

ばやけていたその影が、やがてはつきり人の姿になると、

「 管理人の娘だな」

開口一番、そのがらの悪い男たちの一人が言いました。

「何の用なの。ちゃんとドアから入ってきてほしいものだわ」

ミサオは慌てもしません。さりげなく、本の開いていたページに

しおりをはさんで閉じると、部屋に現れたちんにゅうしゃ闖入者を見えます。二

人は戦士系の男、一人は魔術士です。ファイター ウィザード いかにもな筋肉を無意味にひ

けらかす男たち。力は、たしかにありそうでしたが

「書類を渡してもらおう」

「書類？」

「白の魔術士から受け取っているだろう。南第三遺跡のデータの書類だ！」

「ああ、レイヤくんのあれのことね」

表情をぴくりとも動かさず、淡々と問います。「あの書類に何の用？」

「へっ お前さんが知らないとは思えんがな」

「ただの噂でしょう。誰一人として確かめてはいないのよ レイヤくんでさえ、見ていないと言っているわ」

「ねエはずはねエんだ！ だからこそ、あの遺跡は最初はなっから白の魔術士にみたいなのに依頼したんだからな！」

「みたいな、とはどういう意味かしら」

「決まってるじゃねえか。たった一人でたいていの仕事はこなせるほどの力があり、かつ金さえ払えば絶対に口外しない」

男は下品な笑みを浮かべました。「つまり、ことを荒立てずに始末するにはもってこいってな」

「 レイヤくんもまあ、ひどい評判たてられているものだわ」

ミサオはため息をつきました。「もつとも、彼は否定しないでしようけどね で、あなたはその書類をどうするつもりなの？」

「知れたこと！」

「……あの遺跡に入るつもりなのね」

ミサ才は重々しくうなずきました。「あなたたち、合格よ」

「……あん？」

「これ以上なく悪役的悪役だわ。それも、ストーリーのほんの隅っこで、ストーリーを進めるためだけにちょっと出てくるご都合主義の権化。そういう悪役はおおかたそこそこ力はあるけど、少々頭が足りない」

「なんだとおっ！」

いきりたち、戦士の一人が持っていたハンマーを壁にうちつけます。めごつ、とおだやかではない音がして壁がへこみ、続いて近くの本棚から本が数冊落ちてきました。

へこんだ壁をいちべつしても、ミサ才はペースをくずしません。

「壁の修理は大変なのだけど」

「口が減らない娘だな」

と、今まで黙っていた魔術士が低く言いました。「だがまあいいおとなしく書類を渡せ……言っておくが助けは来ない。ドアに少々細工をしたからな」

「……これもまたありがちね。パーティに一人、やたら冷静で少しは頭の切れる人物がいる」

「黙って書類を出せ」

「知っている？ あなたたち」

ミサ才は黙りませんでした。ただひたすらに、淡々と。

「力もあり、とりあえず一人はそこそこ頭のいい人もいる。そういう悪役がどうしていつも簡単に負けるかを」

「……聞いてやろう」

「パーティに必ず一人はいる、頭の回らない単細胞が、必ず計画を台無しにするからよ」

言って、さきほど壁をへこませたハンマーの男を見やり、

「わざわざ音がもれないように魔術で部屋まで入ってきて、ドアにも防音の術をかけたんでしょうに。壁から伝わる振動はどうなるのかしら？」

「！」

「この両隣が物置だからって油断したのかもね。でも、こういう時は決まっているの。たまたますぐ近くに、そういうのを敏感に察知してしまうような有能さんがいる、って。そして」

まさにその時

ふおん、と男たちがやってきた時と同じような不思議な音がして、管理人室の床に新たな赤い魔方陣が浮かび上がりました。その中にまたもや三つの影。それがあつと言う間に、人間の姿をとりまです。三人の少年

それらはすべて、男たちのときとは比べ物にならぬほどの速さで成されました。

移動術が完了するのにかかる時間の差。それはそのまま、術者の力量差です。

「こうやって、タイミングよく正義の味方がやってくる」

「え、正義の味方って俺たちのことか!？」

と実に嬉しそうに、現れたばかりのトモカズが言いました。スクール時代の同級生たる彼の、ららんと輝く瞳をいちべつしてから、ミサオは重々しくつけたしました。

「……もちろん、正義の味方一行の中にも単細胞はいるけれど」

「どーゆー意味だ!？」

「あら。ムードメーカーはパーティーには欠かせないものでしょう」

「その場をややこしくしてストーリーに味付けをする、という意味でだろ」

茶化すように言ったのは、おかしげな笑みを唇の端にきざんだケン。「どうしたんだミサオ? 突然正義の味方だなんて」

「ハルミに頼まれていたの。スクールで行われている創作小説コンクール的一般公募に投稿してみたいから、ストーリーを一緒に考えてくれって」

「ハルミが? オレは聞いてなかったな」

「賞をとって、あなたケンを驚かせたかったみたいね」

「……じゃあ今オレに言っちゃいけないんじゃないのか？」

「いいのよ。三日で諦めたらしいから」

「……」

「で。私たちがこんな無意味な会話をしている間に、一人黙っていた有能な魔術士がいつの間にか敵を一掃」

「するか。めんどくさい」

腕組みをしていた“有能な魔術士”ミカドは、一言のもとにミサオの言葉を蹴りました。

ミサオは無表情のまま、ふつと妙に芝居がかったため息をつきました。

「いけず……」

「な、なんかつつこみたいけど、すげえ怖い……」
トモカズがぞつとしたようにうめきます。

とりあえずそれは無視して、ミサオはようやく椅子から立ち上がりました。小柄ながらりんとした立ち姿。軽く腕を組んで“悪者”たちのほうを見ると、男たちは現れた少年たちを見つめて硬直していました。顔を蒼白にして。

「バ、バカな……なぜお前らが」

ミカド、トモカズ、ケン。

まだまだ若い彼らは、それでもその姿だけで悪役を震え上がらせるほど。実力が認められているのです。

ミカドが冷えきった目つきで、邪魔な“悪者”たちを見すえました。

「邪魔だ。さっさと消えろ」

「ああ待ってミカド、そいつらを眠らせておいて」

「……」

「あとで損害賠償請求しなきゃいけないから」
指をさすのは、へこんだ壁。

ミカドは面倒くさそうに顔をしかめました。それからしぶしぶとここで断ると、“じゃあ当然あなたが代わりに払ってね”と言

いかなないのがミサオという少女ですから、ひるんでいる男三人に向かって手をかざします。

「ちよ、ちよっと待て！ こんなアホな」

「おとなしくやられなさい」

ミサオは非情な言葉を吐きました。「しょせんちよいの悪役なんでしょう」

我に仇なすものを眠りの深淵へ。落とせ

ミカドのつむいだ言の葉に、見えない力が発動し……

あつという間に、男たちは床にくずれおちました。どうやら、深く眠ってしまったようです。

ミサオが満足げにうなずきました。

「さすがちよいね。みごとにあっけなさだわ」

「……。さつさと話を進めろ」

「話はハルミから聞いているけれど」

「つてうわ、切り替え早っ」

トモカズのつつこみは、もちろん無視。

「モミジとカエデがね……。あなたたちがレイヤくんのところに行くだろうことは予想がついていたから、私もその間に調べておいたのよ」

「遺跡のことを？」

「というより、レイヤくんのデータの裏づけをとろうと思って」

言って彼女は、さきほどまで調べていた本の山と、机の中心に置かれていた書類の束を示しました。

「あの書類。そのちよいの男たちが奪いにきたのだけど。主に、レイヤくんが遺跡内で出会ったモンスターのデータよ。それと、彼がたどりつけた地下二階までの地図」

「地下二階……。もつと深いのか？」

「さあ。あいにく、予測もつかないの」

ミサオから書類を受け取り、三人は順に回し読みします。

「うっわ、えげつな……」

トモカズがいやそうにうめきました。

「頭に入れておけよトモカズ。まさか書類を持ったまま遺跡に入るわけにはいかないからな」

「分かってら。にしても、どいつもこいつもやたら生命力の強いのはつかじゃねえか これじゃレイヤだって手こずるって」

「そうね。で、これがレイヤくんが勝てなかった相手」

言って、ミサオが最後の一枚を三人に示しました。

文章だけではなく、似絵もつけられたそれを見て

ミカドが、不審そうに眉を寄せました。

「それは」

「さすが、知っているのね」

感慨もなさそうにミサオは、“悪者”たちの闖入時に閉じた本を、しおりのところで開きました。

「ここに、その正式なデータがあるわ。ちゃんと覚えていきなさい

い 死にたくなければね」

第5話 彼

いったいどれくらいの時間が過ぎたのか

「カエデ……」

「ん……」

「大丈夫？ カエデ」

「うん…… なんとか」

そんな会話も、いったい何度したことでしょう。それでもお互いの声を聞かなければ、二人は不安に押しつぶされそうでした。

ロープに縛られ、地面に無造作に転がされている二人。湿り気のある地面の上を幾度となく身動きしたために、すでに服も肌も泥だらけです。

ここで目を覚まして以来、土壁のこの部屋を照らすたった一本のろうそくは尽きることなく、また空気を揺らす新たな来訪者は誰もいませんでした。

モミジ姫は、姉姫の向こうに見える金色の山がずっと気になっていました。

天井につくのでは、というほどの山です。やや明かりに乏しい視界に、この距離ではよく分かりませんが、もし本物の金であるなら大変なことでした。

遺跡と図書館があること以外、ろくな名物がない小国フローディア。世界に意義を認められた場所ではありますが、自主生産性には乏しいのが現実です。遺跡発掘や学者業は、決して儲かる仕事ではないのですから。

古くから人の住む地だからこそ、銅や鉄の鉱山はすでに廃坑になっっていることも珍しくありません。そんな中で、これほどの量の金が発見されたなら

遺跡内の発掘物は、基本的に国が所有します。そこから、実際に発掘を行った団体へ分けられるのです。残りはあくまで国の財産で

す。

お父様が、喜ぶだろうな……

国王である父の顔を思い浮かべ、プリンセスはなおさらその金色の山を近くで見て確かめたいと思いました。

心配性の姉姫と違い、“思い立ったらまず行動”がモミジ姫のモットーでした。

モミジ姫はもう一度ロープがはずれないかどうかを確認しました。そしてどうしてもとれそうにないことを認めると、

「！モミジ！」

驚くカエデ姫の前で、ごろごろと自ら転がり始めました。

当然ながら、あまり格好のいい動作ではありません。服も腕も足も顔も髪も汚れ放題でしたが、プリンセスは我慢して転がりました。行動派の妹姫にしてみれば、ただ動かずにいるほうがずっと我慢ならないのです。

目指す山との間にあったカエデ姫の体をなんとか避けながら、モミジ姫は転がりました。目がまわりそうでした。しかしやめませんでした。

それにもなつて、カエデ姫もくるつと後ろを向きました。そして姉姫もようやく、妹姫のやりたいことを察したのです。

プリンセスの体は、やがて何とか目的地にたどりつきました。

金色に浮かび上がる山のそば。転がり続けてくらくなる意識がなんとかまとまると、モミジ姫は改めて山を見上げました。

そして、しばらくの絶句。

「どう？モミジ」

後ろから姉姫の問う声。

「……金、にしか見えない……けど……」

答える口調は、自信なさげでした。それはまあ、一国の姫とは言え別に宝石だの金銀だののプロフェッショナルではないのですから、目で見ただけで鑑定などできるはずがありません。

「でも……本物だったら　すごすぎる」

モミジ姫はほうけたような声音でそう言つて、じつと山を見つめました。どつしりとした重質感。思わず手を伸ばそうとしてく
いこんだロープに、「あ、痛いっ！」と小さく悲鳴を上げます。両腕は後ろ手のため見えませんが、もはや怖くてロープのくいこんだ部分を見たいとは思えません。

「誰なの、こんなことしたの……」

心底悔しく思い、また悲しくもなつて、モミジ姫は泣きそうな声でつぶやきました。

ロープなどという手を使うからには、モンスターではなく人間でしょう。犯人を推理したくても、二人は一国のプリンセスです。疑問おうと思えば世界中すべての人間を疑えます。

モミジ姫は、自分の大切な人々の顔を思い浮かべました。父、母、教育係、召使、兵士、城の人々。

そして、大好きな友達。きつと今、心配してくれているに違いな
いみんな。

その誰よりも、恋しい存在。思い出すのが痛いほど

「ミカド……」

自分の恋人の名を、モミジ姫は小さくつぶやきました。
ダーククリースト

黒の聖職者と呼ばれる彼は、スクール王立教育機関の同級生でした。想い
を通わせてはや二年……

スクールを卒業してからは、会うこともまなりません。彼の町
での評判が、プリンセスの父、つまり国王を浚面にさせてしまった
のです。

「……………」

その場に沈黙が落ちました。

それを破ったのは

「おやおや……困った姫だ。こんな所まで動かれたんですか」

聞き覚えのある、声。

視界の端に人の足が見えて、モミジ姫ははっと顔を上げました。

「あなた」

後ろではカエデ姫の、愕然とした気配。

驚きは、モミジ姫も同じでした。

見上げた先にあったのは、よく知った顔

その唇が紡ぐのは、やはりよく知った声で。

「なんなら、お答えしましょうか？ あなたがたの疑問に、僕が」

白いローブを着た少年魔術士が、につこりと微笑みました。

「レイヤくん」

双子姫はどちらともなく、その名をつぶやきました。

*

「レイヤくん？」

図書館の中に意外な顔を見つけて、ミサオは名を呼びました。

“ 白の魔術士 ” レイヤが、他の利用者にまぎれて と言うには
少々目立ちすぎていましたが 窓に近い席に座っていました。な
にやら分厚い本を広げていた彼は、ミサオの呼びかけに顔を上げ、
微笑みます。

「やあ」

「……何をしているの、こんなところで」

「心外だな。図書館を利用しに来ちゃいけないってのかい？」

「そういう意味じゃないわ」

実際、彼は“ 珍しい客 ” ではありません。スクール時代にはれっきとした優等生であり、それなりに図書館も使う生徒でした。

ミサオはその涼やかな瞳を細めて、インテリ風の少年を見つめました。

彼が手にしているのは、彼らしい本 “ 高等魔術全書 ”。普通の人間なら触りもしない本ですが、彼が読むなら珍しくもなんともあります。

彼女の興味は、そこではありませんでした。

「……体調が悪いのに、安静にしていなくていいのかと言っている

のよ」

「体調が悪い？」

驚いたように、レイヤが小首をかしげます。

「ごまかす気なの？　あなた、第三遺跡で消耗した力がまだ回復していないんでしょう」

「……参ったな、君はそんなに鋭い人だったわけね」

「あれだけのモンスターを相手にしていながら、平気でいられるほうがおかしいのよ」

そう言われて、レイヤはくすくすと笑いました。のんびりとした様子で椅子の背もたれに体を預けます。

彼が南第三遺跡の調査に失敗してから、すでに二ヶ月が経っていました。しかし魔力を一度に扱いすぎると、体に変調をきたすこともしばしばなのです。

レイヤがこの二ヶ月、ほとんど仕事をとっていないことを、ミサオはハルミから聞いていました。

冒険者たちの中でも数少ない、仕事を選ぶ立場にいるレイヤが、仕事をとらない理由は……推して知るべしというところでしょうか。けれど、そのことをミサオに指摘されても、レイヤは何ら頓着する様子はありません。

「別にいいさ、本を読むくらい。にしても、例の非常識パーティにさえバレなかったのにな」

「……バレてないわけがないでしょう。少なくともミカドには」

「はは、やっぱりそう思うかい？」

「彼は……人の魔力やら体調やらに関しては、並じゃなく敏感だもの」

「ああそうだね。彼は……」

両手の指を軽く組んで、レイヤは遠くを見るような目をしました。ミカド。その名は彼にとって避けがたいライバルの名でした。

ミサオは、いえ、彼らを長年見てきた人間は皆知っています。レイヤがミカドに、妙な執着心を持っていることを。

そう、彼は……ただミカドへの興味ゆえに、その恋人たるプリンセスの片割れに、ちょっかいをかけたことがあるような人間です。そのために、競争ごとにはとんと興味の無いあのミカドが、この少年のことだけは忌み嫌っているのです。

「……彼は非常識だからね」

目を閉じて、レイヤは呟きました。

やがて彼がまぶたをあげた時、その顔は不敵に微笑んでいました。ミサオは思いました。彼は、何かを知っているのかもしれない

第6話 異端児

「ミカド？ どこ行くんだよ」

図書館から、城下町を出るための関所に向かう途中で。ミカドが進路を変えたことを、トモカズが不審に思って声をかけました。

ミカドは振り返らずに、「薬草をとり」に「と言いました。

はつとして、トモカズは口をとじます。代わりにケンが、「早く帰ってきてくれよ」と言いました。

ミカドは軽く手をあげて二人にこたえと、一人で行ってしまいました。

友人の後姿を見送って、

「薬草か……」

トモカズがぼんやりとつぶやきました。「やっぱあいつ、洗礼うけてもクレリックになりきるつもりねえんだなあ……」

「最初からそのつもりなんだから、当たり前だろう」

近くの建物の陰へと、二人は移動しました。

「そもそも、洗礼をうけるつもりはなかったろうし うけられる

はずがないと思ってたんだろうな、ミカドも」

「そりゃそーだって。あいつは」

言いかけて言葉をきり、トモカズはため息をつきました。

「……あいつも、ほんつと常識だよな。あげくのはてに魔術士に
ウイザード
もなりやがった」

「魔術士の素養がありすぎたからな」

建物の壁にもたれて、二人は感慨にふけります。

この国における“非常識”を一身に抱えている友人が、本心では何を考えているのか、実は二人には分かりません。ミカドは自分の本音を、親友である二人にさえ、めったに明かそうとはしないのです。

ただ一人 彼の本心を知っている人物がいるとすれば、それは

「モミジ……」

トモカズは、ミカドの恋人たるプリンセスの名をつぶやきました。
「カエデも。無事……かな……」

「ありがちな言い方をするなら、『殺すつもりなら最初からさらわない』ってところだな」

「それは分かっているけどさ……。生きてりゃ全部無事ってわけじゃないし」

ふう、と大きくため息。「もし、モミジに何かあったりしたら……誰がミカドを救うんだよ？」

「……………」

「くそ、絶対助けるからな　おいケン！」

急に勢いづき、友人に真剣な目を向けます。「南第三遺跡について、他になんか　ハルミとかから、聞いてないのか？」

「……あそこを、ひそかに狙っているやつらがいるらしい」

ケンはいさめるようにゆっくりと続けます。「そして時を同じくして……同じ山から、もう一つ“遺跡”が見つかった。それも、金が見つかった遺跡よりも規模が大きいらしい。調査隊が考えたことは、想像がつくだろうか？」

「鉦脈か？」

「ああ。あそこは山のふもとだと聞いたろう？　同じ山で見つかった他の遺跡から　見つかったんだ、金^{きん}が」

「マジかよ！？」

トモカズは声をあげました。「そんな話、なんで有名になってねえんだ！？　金の宝なんて、重要な国の財になるだろ」

「その遺跡自体からとれたのはほんのわずかだったんだよ」

ケンはいさめるようにゆっくりと続けます。「そして時を同じくして……同じ山から、もう一つ“遺跡”が見つかった。それも、金が見つかった遺跡よりも規模が大きいらしい。調査隊が考えたことは、想像がつくだろうか？」

「鉦脈か？」

「さあな。でもたしかに“金製品”じゃなくて純粹に“金”だったらしいから」

「ケンはいさめるようにゆっくりと続けます。そして時を同じくして……同じ山から、もう一つ“遺跡”が見つかった。それも、金が見つかった遺跡よりも規模が大きいらしい。調査隊が考えたことは、想像がつくだろうか？」

昼下がり。もっとも町が活気づく時間帯です。目の前をいそいそと、忙しそうな町人たちが通りすぎてゆきます。

「……そういう話は、裏で広まりやすい……。やがて調査隊以外にも、独自にそれを狙う連中が出てきたってことさ」

「そんなの一つが、さっきの“ちょい悪役”ってわけか……」

トモカズはそつと、腰にさげた剣の柄に触れました。

「なあ。俺たちがあそこに行くことって、もうバレてるかな？」

「目的はともかく “行く” こと自体はバレてるかもな。レイヤに会いに行っていたのを、知ったやつがいれば」

「そーだよな。よほどの理由がなきゃ、俺たちあいつに会いに行かないもんな。しかも天敵のミカドをつれて」

自慢ではありませんが、三人はそろって町を歩いていたりすれば、どうしようもなく目をひく存在でした。そんな三人が、こちらもまた目をひく“白の魔術士”レイヤと接触したことを、隠し通すのはきわめて難しいことです。

そして四人が接触したことを知ったなら 少し考えれば、その理由も簡単におしはかれるでしょう。

「バレてんなら……面倒だよなあ……」

二人は、視線を交わしました。トモカズは続けました。

「さっきミサオんとこに行ってたやつら あいつらよりもっと馬鹿なやつらだったら？」

「そうだな 」

唐突に二人を囲む人影。

ざつと八人 まったく慌てることもなく、ケンもたれていた壁から背中をゆっくり離しました。

「 こうやって、オレたちをターゲットにしてくるかもな」

「 やつと見つけたぜ、お二人さん……」

八人は、どれも見知った顔でした。冒険者と名乗っていながら、いつも酒場で仕事さがしかしてない類の連中です。

「あんたら、南第三遺跡に行くんだろ？」

「だったら、何だって？」

中心人物らしい男が、へつらうような顔をしました。

「俺たちもつれていってくれよ　あそこはいくらあんならでも危険だろ？頭数を揃えていきやあ、危険もぐつと減るってもんだ」

ケンは一瞬ため息をつきました。

プリンセス誘拐の事実を、他の人間に知られるわけにはいかない

そのためには、あの遺跡へはあくまで三人で行かなくてはなりません。

かと言ってまともに断ったところで聞くような人間たちではないでしょう。となれば、少々イメージが悪くとも……

「気持ち嬉しいんだけどな」

ケンは苦笑してみせました。「無理な相談だな。人海戦術でどうにかなる場所じゃなさそうなんだ、あそこは」

「か、数だけってわけじゃ」

「言わせたいのか？　一番辛辣しつこなやつが、せつかく今ここにいないっていうのに」

「そだな。ミカドがいなくて良かったよ」

ケンのあとを、トモカズが続けます。「大体さあ、自分たちだけであの遺跡に行こうとはしなかったんだろ？　そんな根性じゃ入れねえよ、あそこは」

「ば」

男たちが、顔を紅潮させました。「ばかにしやがつて……！」

「馬鹿にしてるのはどっちだ」

ケンが、すっと目を細めました。常に柔らかい表情を浮かべているその甘いマスクを、静かに、冷ややかにして。

「オレたちを踏み台にしておこぼれにあずかるうって言うんだろ？　自分たちに自信がないからオレたちをアテにした。そんな根性なしのために、誰が踏み台になんか甘んじるか」

男の一人が、かっとなえしました。

「お前らだって、あのダークプリーストの手を借りなきゃ大したことできないヒヨっこだろうが！」

そつだそつだと、男たちから次々と罵声が上がります。

「」

トモカズの、剣の柄に触れていた手に、力がこもりました。

そう、それが世間での二人の評判でした。

非常識な人間な力を借りてのし上がっていく、非常識で卑怯なやつらだと。

男たちの罵声はどんどんエスカレートしていきます。

「ガキのくせにたった三人で お前らにはその自信があるってのか！？ あの遺跡を攻略できるほどの ！」

「は！」

ケンはずけるように吐き捨てました。「自信があるうがなかるうが、あんたらの力を借りるほど堕ちちゃいないな 悔しいか？ だったらオレたちに勝ってみるんだな。八人で来ればいい！」
言われるまでもなく

全員が、すでにそれぞれの得物を抜き放っていました。一番最後に、剣を鞘から抜いたのは、他ならぬケン ですが。

勝負は、あつという間につきました。

「……なんかなあ……」

役目を終えた剣を鞘に戻しながら、トモカズがぼやきました。

「どうして俺って、いいところで目立たないんだ……」

「何を言ってるんだ。オレたちはちゃんとお前を頼りにしてるさほら、お前のほうが五人やったろ」

「それって、面倒なところは俺に押しつけてるだけじゃないのか……？」

「気のせいだ」

すまして言って、ケンも武器をおさめます。

二人の前で、痛そうにうめいている屈強の男たち八人。

中心人物らしかった男のところへ、トモカズは近づいていきまし

た。当人はどうやら完全に気絶しているようです。その顔をのぞきこみ、

「……ミカドは友達なんだよ。それが分からねえお前らなんかに負けてたまるか」

こいつらどうする　？　尋ねた彼に、相棒の即答。

「ほつとけ。ミカドが戻ってきたら、すぐに出発するぞ」

またからまれるのも面倒だからな

そっけないケンの言葉に、トモカズも異論はなかったのです。

*

フローディア城下町の西南部に、小さな施設があります。

病院

教会が絶大な権力をもつこの国において、もつとも存在価値を認められていない場所です。聖職者は“許容”の二文字のために、病院の存在を決して否定しませんでした。事実上この施設は、あつてないも同然でした。

それでも。神の癒しに頼らず人間自身の治癒力を信じる者たちが、わずかに集まって……この場所を守っています。

病院の敷地内には、薬草畑があります。

ミカドはその畑に足を踏み入れて、しゃがみこみ選んだ薬草を皮袋につめていました。

本来薬草は、干して使うものがほとんどですが、今は干している時間がありません。生のままで使えるものを、慎重に摘みとってきます。こころなしか指先が急いていました。

と

「誰だ！」

背後から、声。

ミカドは振り向きませんでした。その声が聞こえるずっと前から、

彼は人の気配に気づいていました。その気配が、ずいぶん離れた場所にいる時に、もうすでに。

あらゆるものに敏感な彼の体質　それは、ごく少数の身内が知っている事実です。

「おい！　そこで何やってる　」

遠慮なく近づいてくる、足音。そしてある距離で、突然とまりました。ミカドは予想をつけました。顔が見えなくとも、服装で気づいたのだろう

「……お前は……」

信じられないと言いたげなつぶやきが、次の瞬間にはますます不愉快そうなり声になって。

「何を、しにきた。この裏切り者め」

「……見れば分かるでしょう」

「薬草など、お前にはもう必要ないはずだ！」

「……………」

ミカドはゆっくりと振り向きました。

そこにいた中年男性は、やはり見知った顔でした。病院の院長の弟です。憎悪に顔をゆがませ、ミカドをにらみつけて。ミカドは静かに言葉を返しました。

「……必要ないかどうかは、俺が決めることです」

「ぬかせ！　ダークプリーストが……っ！」

「今は、あなたと話してる暇はない」

「ああ、お前はいつでもそうやって俺たちを避けてきたな　」

男は、ひきつった笑みを浮かべました。こらえていた何かを吐き出すように

「お前が教会に入った時！　いったい何人が絶望したと思っている！？　お前は、お前は　」

ミカドはただ、相手の瞳を見つめていました。

怒りと軽蔑と　悲しみと。そんなものが入り混じった、相手のその瞳を。

「お前は、この病院の跡取りだったんだぞ！」

「いい加減にしてください、叔父さん」

そっけなく、ミカドは言いました。「父と俺は昔からそりが合わなかった。そのことはご存知でしょう　父は、何もすんなり俺に継がせようとしていたわけじゃありませんよ。だから、あの人自身は俺がどうしよう構わなかっただろうし　」

少し、間を置いて。

「俺も、自分が決めたことに、つべこべ言われるすじあいはありません」

「は。　自分が決めたこと、ね。病院の息子に生まれ、ファーマシスト薬師として教育を受けながら、天敵の教会に入り　洗礼までつけて！」

叔父は大げさに腕を広げました。「あまつさえ魔術士だと！？あれほど邪悪な職業はないんだぞ　よくもまあ、教会から追い出されないものだ！」

教会が魔術士を嫌うこと。それは常識です。なぜなら、魔術士の扱う“魔力”とは　人間の吐き出した邪気エネルギーそのものなのですから。

「わけが分からないな、お前のやることは……！　　いったい何を考えているのだから！　非常識もたいがいにしろ！」

「何度も言わせないでいただきたい」

ミカドは鋭く言いました。

「あなた方に、つべこべ言われるすじあいはない。病院はあなたが継げばいいことだ　　だいたい、現院長は健在でしょう。どうしてそんな話をしているんです」

「お前　」

「たしかに、今の私がこの畑のものをとっていくのは問題かもしれませんが、それくらい後で落とし前をつけます。今は急いでいるんです。邪魔をしないでください」

早口に、けれどはっきりとそう言うと、ミカドは薬草選別の作業に戻りました。背後の気配がまだ何かを言いたそうなことに、彼は気づいていました　　けれど、もうそんな時間はありません。

背後の気配は、いつの間にか消えていました。

ひよっとしたら、あの後にも叔父は何か言っていたのかもしれませんが、もうどうでもいいことでした。

薬草を袋に詰め終わり、ミカドは立ち上がりました。

モミジたちを助けなければならない。二人を……

無理やり思考をそちらに向けようとしたミカドでしたが、不本意ながら自覚していました。叔父との再会で、心に影がさしたのを。

叔父は、彼を常に二つ名で呼ぶのです。

ダークフリースト
“腹黒な聖職者”と。

「今は、そんな場合じゃないんだ……」

自分に言い聞かせ、ミカドは足早に、病院の敷地内から出ました。二人の友のいる場所へ 足を向けようとしたその時。

視界に、信じられないものを見て、思わず足を止めました。

「大司教さま……？」

白と水色の荘厳なローブ。教会でいであちそのままの老司教が、道の往来にたたずんでいました。天を仰いで 昼下がりの太陽の光を浴びようとしているかのように、穏やかに目を閉じたまま。

「」

ミカドは言葉もなく、ただそれを見ていました。やがて、

「ミカド」

老司教が、彼の名を呼びました。

風のように自然な声。はっと息をのむミカドの前で、老司教がゆっくりと顔をこちらに向けます。

開かれた目が、少年を見つめていました 珍しい、空色の瞳です。

「ここに、いると感じたのでな」

年老いた大司教は、柔和な笑みを浮かべました。「待っておったのさ。お前は、これからどこへ行くつもりだ？」

「……………」

「言いたくないか。そうだな……お前はいつもそうだ。だが、そんなことは構わんよ。ミカド」

と、ふいに目を細めて、「さきほど、口論しておったな……」

「？」

「」

「聞こえたぞ。お前の叔父上殿だろう。なぜ……」

その瞳が、優しい光をおびました。

「なぜ、説明しない……？ 教会に入ったのは、ただ神の癒しの力をもつと知るためだけにだ。それを知らなくては、人間自身の治療力に対抗することはできないと考えたからだ……」

「」

「この私にさえ、あつさり白状したことであるのにな」

「あなたには、告げるべきだと感じただけです」

かつて……ミカドは教会に入る際に、この大司教に入信の理由を、はつきりとそう答えました。「すべては自分の、ファーマシスト薬師としての使命のため」だと。

教会にしてみれば、これほどふざけた理由はありません。なのに

……

この大司教は、病院の跡取りたる少年を受け入れました。そして、正式な洗礼さえも受けさせました。

「私は」

しわの多い目じりに、深く笑みが刻まれます。「お前が気に入っている……ミカド。お前のまつすぐさと……不安定さに」

「」

「だが、お前はその性質ゆえに自ら袋小路に迷いこむこともある。お前一人の問題ならばそれでもよいが、それは時にまわりを巻き込む……」

ささやくように、老司教は言葉をつむぎました。

よく聞きなさいと。

「土壇場でまで、意地をはることはない。よいか、意地と誇りは別

物だ。いざとなったら」

優しい空色の瞳は、ミカドの心をたしかに揺さぶりました。

「お前も、すがっても構わないのだよ。神に、な……」

それがたとえ、異端の聖職者であろうとも。

ミカドの脳裏に、明るい少女の顔が浮かびました。

ミカド

迷いもなく、何の裏もなく、ただそう呼ぶ、無邪気なプリンス

……

モミジ……

なぜかひどく心が締めつけられて、ミカドは片手に顔をうずめました。

タスケニ、イカナクテハ。

胸騒ぎのまま、再び顔を上げた時、司教の姿はすでにそこにはありませんでした。

昼下がりの太陽は、何事もなかったかのように……フローディアの町を、やさしく暖めていました。

第7話 謎の遺跡

フローディアの国の、まさに南に位置する山脈。

そのやや西よりの山のふもとに、目的の場所がありました。

「……なんかフツの洞窟に見えっけどなあ」

ふもとにうがたれた大きな穴。その前に立ち、トモカズが不審そうに首をかしげます。

「見かけはな。だが……」

ケンは洞窟の奥を見つめようとしました。あいにく、完全に調査が止まっているために明かりが残っておらず、穴の中は真っ暗でほとんど見えません。

けれどその暗闇に、不穏なものをケンは感じ取りました。

そしてそれに対し、彼よりずっと敏感な人間がすぐそばにいることを、ケンは知っていました。

「ミカド。……どうだ？」

促され、ミカドが不愉快げに顔をゆがめます。

ミカドはさきほどから、ケンやトモカズからは一歩退いた位置にいました。それが答だと、ケンは察していました。

二人の様子の意味にようやく気がついたトモカズが、顔をひきつらせました。

「おい……そんなにすごいのか？　ここ」

「……予想外なほどじゃない」

そっけなく、まるで何でもないことのようにミカドは告げましたが

魔力。

一部の人間にしか感じ取ることのできない、その力の正体は

……邪気、すなわち人間の吐き出す念の　とりわけマイナス方向へのエネルギーそのものなのです。例えば怒りや憎悪、嫉妬といった、普段歓迎されないエネルギーです。

魔術士は、空气中に当たり前のように存在する邪気　魔力を感じし、自らの中に取り込み、それを操ります。本来忌み嫌われる邪気を、わざわざ自分の中に取り込む……だからこそ、魔術士は大変嫌われる職業です。

「入れそうか？　ミカド」

ケンがミカドの顔色をうかがいます。魔力は体にいいものではありません。魔力の気配に敏感であればあるほど　つまり、強力な魔術士であるほど　、気分が悪くなるという矛盾を生み出すのです。

ミカドの体質を友人たちは知っていて、だからこそその心配。けれど、返事は即答でした。

「入る以外に、道があるのか」

「……そうだな」

ケンは微笑み、トモカズと目を見交わしました。

彼らの友人は、まだまだ健在のようでした。

我らに光を。照らせ

ミカドの静やかな言の葉とともに、洞窟内が淡い光で満たされました。

浮かび上がった洞穴の奥を眺めやり、ケンが肩をすくめました。

「……参ったな。目の前にいたのか」

びんっ！

突如、襲いくる触手。飛びのく三人。

視界に残像を残すような速さで少年たちのいた場所に穴をうがつた触手は、次の瞬間には元の長さに収縮していました。

うねうねとうねる何本もの触手。

その中心に、天井からぶらさがった“目玉”

「イービル・アイか。洞窟^{ダンジョン}の入り口にいる魔物としては普通だな」
人間の頭二つ分ほどの大きさの“目玉”は、不気味な粘液をもつ

て天井と、他の触手とつながっています。頭上のその“目玉”までの距離は、ざっと一メートル。剣を伸ばすだけでは傷つけにくい場所です

油断なく数多い触手の動きを観察しながら、トモカズが仲間たちに訊きました。

「なあ、おい。こいつってレイヤの報告書にもなかったか？」

「あつたな」

「ってことは、あいつが倒したんじゃないのか？ 一度」

「そうだろうな」

「……なんでここににいるわけ？」

「びしゅんっ！」

「二人とも、先に行け！」

凶器の触手をかわし、ミカドが叫びます。迷わず残りの二人は走り出しました 洞窟の奥へと。

途中、動く獲物を狙った触手をよけるのではなく剣で切り払いまゝ。ごたぶんにもれず再生能力の高い触手。雨のように天井から次々と伸びてきます。

それでもケンとトモカズは触手にとらわれず走り続けました。そして二人からやや遅れて同じ方向に走ったミカドは、

天井の“目玉” 本体を通り越してしばし行った場所で。

身を翻し、言の葉をつむぎます。

我に仇なすものに地獄の業火を。燃やせ ！

瞬間、

ごおっ……！！

発生した炎が洞窟を埋めつくしました。見ているだけで目が焼かれるような赤い色がその場を染め、うねる触手を、そして“目玉”をのみこんでいきます。

先に行くトモカズたちさえも背中に熱気を感じ、それだけで二人はじっとりと汗をかきました。

「うっわ、ミカド最初っからマジだし！」

「当たり前だ！」

ミカドの代わりにケンが叫び、はっ　！　と気合一閃、目の前をさえぎろうとした影を切り裂きました。

ぼとぼとと地面におちたのはコウモリに似た羽のあるもの。

「あゝくっそ、次から次へと！」

トモカズのわめきながらの剣筋が、道の先から現れた凶暴なるものたちを、つらぬき、叩き潰し、切り飛ばしてゆきます。

彼らの場合、切り込み隊長は常にトモカズの役目でした。彼の問答無用の勢いは、戦闘態勢に入ったばかりの相手には非常に効果があります。

やや後ろから援護するのがケンの仕事。トモカズがしとめそこなったものを、あるいはトモカズのふいをついたものを、慎重確実な動きで葬り去ります。

そして今日はさらに、最後尾をミカドが。

発動さえ間に合えば近距離遠距離無関係な“魔術”を駆使して、パーティを囲もうと予想外の位置から現れた連中を一掃する　この洞窟は“魔力”の宝庫です。彼の力は、尽きることがありません

三人の進んだ道に、モンスターの死骸が残されていきます。

人間と違い、ほうっておけば消滅していく死骸。

……けれど、復活するわけではありません。

「だーかーらーさー！」

剣をふるう合間にも、しきりにトモカズは仲間たちに訴えました。

「数が多すぎねえか！？　レイヤだってかなりの数倒したはずだろ！？」

「調査隊が入ってからけっこう経っているからな……！　また外部から入ってきたのかもしれないだろう！」

「それにしちや、報告書通りのメンツじゃねえか！」

「モンスターの居場所にも相性があるんだ！　この場所を好むタイプが揃ってるっただけだろうが！」

「そりやそーだけどさ……！」

「よそみをするなトモカズ……！」

背後からのミカドの罵声。トモカズは慌てて、飛んできたブーメラン状の刃をかわしました。手のひら二つ分ほどの大きさの凶器でしたが、それだけに回転が速く鋭く見えます。

まるでそれ自体に意思が宿っているかのように、ブーメランは空中でくるりと方向転換してふたたび向かってきました。でやあつ！とトモカズはそれを、真正面から叩き折りました。しかし、

「奥だ！ まだ来る……！」

暗がりになつて見えないほどの奥から、次々に同じ刃が空気を裂きながら向かってきます。ただでさえ広くない洞穴の中を

「駄目だ……っ避けきれね」

先頭にいたトモカズは、とっさに利き手ではない左腕で顔をかばいました。

ピシッ、ヒシュッ、パシュッ

いやな音がして、刃がかすめて通り過ぎていくのが分かりました。命中精度がよくないらしい、これなら　そう思い、トモカズは顔をかばっていた腕をはなしました。その時、

ズバツ！

「　　った……！」

彼は悲鳴をあげました。今動かしたその左腕を、まともに刃が切りつけていきました。脳まで届くような、痛みとはまた違う衝撃がまず彼を襲い、それから一気に痛みが広がります。

凶悪なる刃を力無きものへ。砕け　　！

ミカドの魔術が、飛び交っていた刃をすべて粉碎しました。ケンがトモカズに駆け寄りました。

トモカズは地に膝をつきました。その二の腕が、血に染まっていました。相当な痛みであつたに違いありませんが、そこはトモカズもプロの冒険者です。決して、剣を手放しません。

ケンは何も言わずその傍らに膝をつくと、すぐに止血用の布を取

り出しました。その一枚をまず腕のつけねあたりにある止血ポイントに強く縛りつけ、そして振り向かないまま、背後から近づいてきたもう一人の気配に呼びかけます。

「ミカド」

「替われ」

ケンに残りの布をミカドに渡し、場所をゆずりました。

「悪り……」

つまったようなトモカズの謝罪には何も応えず、ミカドは淡々と作業をしていきました。自身の道具袋をさぐり、薬草を選び出します。彼が手に取ったのは、長さが10センチほどもある肉厚な緑の葉。ベンケイソウという、遙か遠い国の英雄の名がつけられた草でした。

数枚取り出し、軽く手でもんで柔らかくした後、その薄皮をはがしてトモカズの傷にあてます。傍らで見ていたケンを「手伝え」と促し、彼に患部に貼った葉を押さえさせると、自分はその上から布を縛りつけました。

応急手当が済むと、ミカドは目を細めて言いました。

「だから、うかつだと言っているだろう」

「……………」

「痛みはこらえる。 どうした？」

最後の問いは、ケンに向けたものでした。

ケンはいつの間にかトモカズではなく、地面に散らばったブーメランの残骸を眺めていました。残骸はちょうど、チリとなって消えるところです。

「 たしかに 」

ケンは呟きました。「トモカズの言う通りなんだ。この状態は、少し違和感がある……………」

レイヤが数多く倒したはずのモンスターが、まだこれほど残っている……そのことが、トモカズの疑問に正論を返していた彼ですが、やはりおかしいのです。

しかし、ミカドは気にもとめないようでした。

「何も問題はないだろう」

立ち上がりながらあっさりとそう言う彼に、ケンもトモカズも腑に落ちない表情を向けます。

ミカドは言いました。

「不思議なことはない……あの報告書の通りならな」

「どういう意味だ？」

「ヤツが、仕事を失敗させた原因。それが本当のことなら、この状況も不思議ではないと言ってる」

「あの、最後の？」

ミサオがわざわざ文献から調べだしてくれた、レイヤが唯一勝てなかった敵。

行くぞ、とミカドは二人を促しました。

「……そいつが本当にいるのかどうか、もうじき分かる」

三人がこれから向かうのは

レイヤがたどり着けたうちの最奥、地下二階……

第8話 偽りと……

「レイヤくん……」

双子姫がその名を呼んだ時、当の相手はしばらく反応しませんでした。

白いローブ。銀縁の眼鏡。どう見ても、同級生のインテリ少年です。声も、口調も。

彼だ

カエデ姫は思い出していました。

自分たちをさらったあの人物は、彼だ。

「レイヤくん……！ 何でこんなことを……！」

カエデ姫はめったに出さない強い口調で叫びました。その声に、多大に悲しげな色がまじっていました。彼女にとって彼は、少なからず意識をする相手です。学生時代に……たくさんのことがありました。

遠く、モミジ姫の傍らに立っている少年は、ようやく口を開きました。

「ああ、なるほどね。レイヤって言うのか 彼は」

「……………」

双子姫はそろって訝りました。そんな二人の前で、レイヤによく似たその人物はにっこり微笑みました。

「申し訳ないんだけど、僕はその“レイヤ”って人間じゃあない。いや やっぱり彼なのかな？ まあどっちでもいい」

「な、何を訳の分らないことを」

「あなたがたには説明したところで分からないでしょうね」

あざけるような調子のその言葉 皮肉なことですが、そういうところもかの少年にそっくりです に、モミジ姫がむっとして声をあげました。

「馬鹿にしないで……！」

「馬鹿にしますよ。あなたがたは自分の立場を分かっていない。城の者がどれほど苦心して、神経を繊細にしてあなたがたを守っているのかそのことを自覚できていない。結果がこれだ」

両腕を広げ、今いる場所を示します。

モミジ姫は唇をかみました。悔しいことですが、もつともです。

今のこの窮地は自業自得に他なりません。

「とりあえず」

“レイヤ”は言葉を続けました。「なぜ、あなたがたをここに連れてきたかは説明しておいてもいい。これを、見せたかった」

視線を促すのは……金の山。

「この価値はさすがにお分かりのようですね、プリンセス？」

くすくすと笑いながら、泥だらけのモミジ姫を見下ろします。

「じゃあ、やつぱりそれは本物なの……？」

「偽物じゃあ、面白くない」

あっけらかんと、少年は言いました。

「それにもっといい話があるんです　裕福ではない小さな国なら、のどから手の出るほどほしいものがこの遺跡にはある」

「……………」

「それをうまく扱えば」

少年の眼鏡の奥の瞳が、おかしげに細められました。

「いくらでも、金を生産できるんです　永遠にね」

地下二階の奥に進むにつれ、空気のにごりがますますひどくなっていきました。トモカズやケンも、さすがに不快感を隠せません。特に怪我人のトモカズにはつらい状況です。

「怪我は」

「血はもう止まった」

トモカズはいつの間にか、腕のつけねを縛っていたほうの布をはずしていました。血が止まったのはたしかなようでしたが、それで

も左腕は力なくだらりと下がっています。

とは言え、トモカズが気力で決して負けないことを、ケンは信じていました。だから、必要以上の心配はしません。今の彼のきがかりは……

「ミカド、お前は？」

空気ににぎりにもっとも敏感な友人に言葉を向けますが、返事はありませんでした。

ミカドはひどく険しい目つきで、前方をにらみつけていました。彼がこれほどあからさまに警戒心を発しているのは珍しいことです。ミカドの様子に気がついて、残りの二人も体を緊張させました。洞窟内のモンスターはあらかた消滅させてきました。不思議なことに奥にゆくほど、その気配は少なくなり、今ではまったく敵の息吹を感じません。あるいは奥にいたモンスターも、三人の闖入者を目指して入り口付近に集まっていたのかもしれませんが。

モンスターの気配がなくなった代わりに、増したのは、邪気の圧迫感。ケンやトモカズにさえ、はっきりと感じ取れるほどに。

ミカドが何かを呟きました。魔術の言の葉だったのでしょうか、元からその場を照らしていた魔力の明かりが、その照らす範囲をさらに奥へと伸ばしてゆきます。

「いる」

黒髪の魔術士は囁きました。

キラッ

一瞬、まばゆすぎる光が奥のほうから放たれ、三人はとっさに顔をかばいました。

それもほんのわずかな間

腕を顔からはなした時、その光の正体は、ミカドの明かりによって三人の前にさらされていました。

「あれは……」

行き止まりになっている、道。

突き当たりの土壁に……はめこまれている、輝くもの。

「鏡……」

呟いて、トモカズが一步踏み出そうとしました。しかし、
「動くな！」

ミカドの鋭い制止の声が、その足を止めました。

「ミカド？」

「近づくな。厄介なことになる……」

動きを止めた三人の前で、人一人映し出せる大きな鏡は、ミカドの明かりを反射させ、時折まぶしい光を放ちます。そのリズムが、まるで鏡の鼓動のようでした。

こんな場所にあるというのに、磨きぬかれた輝く表面。その縁には細かい装飾がされています。暗闇の中、わずかな明かりの中ではんやりと浮かび上がる金色の縁 とても趣のある鏡です。

「ここ……以外に、道……なかったよな？」

トモカズが不安そうに問います。

「なかった。目に見える道は」

「じゃあ……どうすんだ？」

「この奥に」

ミカドは目を細めました。「この鏡の向こうに……気配がある。何かの気配が。道か、小部屋か……」

「この鏡を壊すか」

そう言ったケンは、その甘いマスクをいつになく陰しくしています。トモカズも、ぎりぎりとお歯をのみしめします。

三人は分かっています。この鏡を壊すしかない。けれどそれはとても難しいことだ、と。

なぜならこの鏡こそが

“白の魔術士”レイヤが敗北した敵。彼の報告書に、とりわけ強調されて記述されていた、その名は、

“精霊のうつし鏡”。

ふいに、“レイヤ”が虚空に視線をやりました。

何かを見たというよりは……見えない何かを、感じ取ったという様子でした。

「へえ……もう着いたのか」

彼は呟きました。

「な　何が……」

モミジ姫は必死に体を起こそうともがきながら、少年に問いました。そんなプリンスをいちべつして、

「どうやら助けがきたようですよ、愚かなプリンスがた」

「たす　け？」

「美しい話だ。あなたがたがいかに愚かな姫でも、命をかけてこんなところまでやってきてくれる人間はまだいる」

「……………」

「さて」

“レイヤ”は軽くそのマントを払いました。ふあさ、と純白のマントがなびきます。

「僕も行くことにしようかな。　と言っても、あなたがたをこんなところにいつまでも転がしておくのも酷でしょうから……………」

少年が何事かを呟きます。魔術士の扱う言の葉でしょうが。

次の瞬間、パシッ！と音がして、双子姫を戒めていたロープがすべて見えない力に切り裂かれ、ほどかれていました。

すぐさま、モミジ姫が上体を起こしました。

「どこへ行くの……………」

「あなたがたのお迎えの皆さんと、遊びに」

答にならない答を返し、“レイヤ”は唇の端をあげました。

「あなたがたはここにいい。お迎えの皆さんが、助けにやって来るまで。もっとも」

くすくすと、どこまでも耳障りな薄ら笑い

「彼らが、ここまでやって来られるかどうかはわかりませんが、いかに非常識パーティーといえどもね」

「　　！」

“ 非常識な ”

その単語が示す人物たちなど、この国では限られています
悟って青ざめる双子プリンセスの前で、少年はもう一度くすりと
微笑み……

「……それでは」

「待つて……！」

呼び止める声もむなしく、少年の姿は言の葉とともにその場から
かき消えました。

「……っ」

モミジ姫は唇をかみしめ、「カエデ！」

と姉姫のほうを振り返りました。

姉姫も、すでに体を起こしていました。けれど、うつむいたまま
返事をしてくれません。

「……カエデ？」

よたよたと立ち上がり姉姫に近寄ったモミジ姫は、不安気にその
顔をのぞきこみました。

「カエデ……」

「……うつん」

聞こえてはいたのでしょうか、カエデ姫はただ、首を振りしました。

「大丈夫、少しぼんやりしただけ……」

顔をあげた姉姫の表情がわずかに微笑んでいるのを見て、モミジ
姫はほっとし、それから気を引きしめました。

「ミカドたちが来てる……」

呟き、そして。

「私たちも、動かなきゃ。ここから出なきゃ」

見渡すその場所。地面に転がっていた時とはまるで違う世界に見
えましたが、それでもやはり土に囲まれた……密室。

けれど、モミジ姫は確固たる決心とともに、もう一度呟きました。
「ここから出なきゃ」

それ以外、自分たちがやれることはない
と、そう思っ

第9話 第2の

知っているかい？

僕が君に興味を持ったその理由を。

簡単なことさ。君は似ているんだ

僕自身にね。

*

図書館内の点検も、管理人の娘ミサオの仕事のひとつです。もちろん警備員は雇っていますが、それだけに任せないのが彼女の方針でした。その理由はといえば……友人たちも、あえて聞こうとはしないトップシークレットですが。

それはそれとして、今日も彼女が図書館内を一巡りしていると、魔術学のコーナーの入り口付近に見知った背中が見えました。

(……珍しいわね)

思うが早いかすたすたとそのポニーテールの背中に近づいてゆき、

「ミフユさん」

「きゃっ！」

ほんと肩を叩かれて、同級生のミフユは小さく悲鳴をあげました。ぱつと振り向き、ミサオの顔を見て、

「おおおお、驚かさないでっ……！」

「館内では静かにね」

ミサオはそっけなく言ってやりました。あなたのせいでしょうと言いたげなミフユの目はもちろん無視。

「こんなところで何をしているの？」

「そりゃ本をさがしに ああ ええと 」

言いかけ、ミフユはとっぜんミサオに顔を近づけ小声になりました

た。

「……ねえ、レイヤくんってまだここにいる？」

「？ いいえ、ついさっき帰ったと思うけれど」

それを聞き、ポニーテールの少女はほっとしたようにため息をつきました。

「良かった……今彼の顔なんか見たら、ぶん殴っちゃいそうで」

「あら」

ミサオは片眉を跳ね上げました。「あなたが愛の暴力をふるうのは、天にも地にもトモカズひとりきりだと思っていたのに」

「そーゆー、ビミョーに腹が立つ上にビミョーにこつ恥ずかしい言い方やめてくれる……」

なにやらひきつった笑みが返ってきますが、これまた無視。

とりあえず、ミフユがレイヤを避ける理由はミサオも知っているのです。

「あなたのお父さん、お体のほうは？」

「……順調、だと思うけど。本を読む気力が出てきたみたいだからレイヤがいないと聞きようやく安心したのか、ミフユは魔術学コーナーに踏み込み本棚を眺め始めます。ミサオは彼女に並んで一緒に本をさがしました。

察するに、ミフユは父のための本をさがしにきたようです。

二ヶ月前、あの南第三遺跡の調査に入り、大怪我をして帰ってきた父の。

「あれ以来ねえ、お父さんがレイヤくんを怖がってるのよね」

お目当ての本を本棚から引っ張り出し、その表紙を見下ろしてミフユはため息をつきました。

「こんな風に、とつぜん魔術の勉強なんか始めちゃうくらいには」

「……レイヤくんを？」

いぶかしく思い、ミサオは目を細めます。

“白の魔術士”レイヤが依頼人や同行者に優しくないのは、

有名なことです。いまさら、のはずですが

「そもそもさあミサオさん。あなたがいけないのよ護衛によりによつて彼を選ぶから」

「他に適当な人材がいなかったのよ。トモカズたちは他の仕事についていたから」

淡々と返し、「それよりも。怖がる対象がどうしてレイヤくんなの？」

遺跡調査の失敗　それにより遺跡そのものやモンスターを怖がるようになる人間ならばザラにいます。

なのになぜ

ミフユが、ふとミサオを見つめました。暗い半眼になって。

「……彼自身は、何も言っていないわけね？」

「……“精霊のうつし鏡”に負けた、ということ以外には」

久しぶりに、あっさり負けちゃったな。

無頓着そうにそう言いながら自分にデータを見せてきた白の魔術士の姿が、ミサオの脳裏に浮かびました。

彼はまだ何かを隠していると　そう思ったのは、つい先刻。

「……お父さんがね」

ミフユが低く、小さく言葉を続けました。

「最近になって……記憶が戻ってきたんだって。二ヶ月前　あの鏡の前で……何が起こったかを」

精霊のうつし鏡

そのあまりに不思議な能力ゆえに、“精霊が作ったのだ”という伝説が生まれてしまったそれは、

その前に立つ存在をそっくりそのまま映し出し……

そして、実体化させることができる鏡のことでした。

早い話が複製機能がついた鏡、というわけですが

「……ああ、そうか」

ここにきてようやく、ケンが合点がいったというようにうなずきました。

「だからモンスターが尽きないどころか増えていたわけだな。一匹残ってさえいれば、この鏡がいくらでも複製してくれる」

「……近づいたら、もう一人俺が現れるってことだよな」

何を想像したのか、トモカズが不気味そうにうめきました。

「うつわ、なんか気色悪ってゆーか絶対やだそんなの！」

「……もう一人自分がいることが、そんなに嫌かい？」

「たりめーだ！」

聞こえた声に力いっぱい答えてから

はた、と動きをとめます。傍らにいた友人たちに視線を送り、「今何か言ったか？」と問いましたが、二人は答えてくれませんでした。

くすくすと、笑い声がありました。なじみのあるその気配に、トモカズは顔をひきつらせました。

『相変わらず、単純なことだね……君は』

あざける言葉とともに 鏡と、三人の少年とのちょうど中間あたりに現れた、白い少年

「レイヤ……？」

「そういう名前らしいね」

と、白いローブの少年は微笑んだまま言いました。「あの双子のプリンセスが教えてくれたよ。まあ他に名前もないし、僕のこともそう呼んでくれて構わないけど」

「……！」

トモカズが声を荒らげました。「二人は……！ここにいないだな！ 無事なのか！？」

勢いづく彼に、“レイヤ”は呆れたような視線を向けます。

「そう聞かれて正直に答えたところで、君らはそれを信じるのかい？」

「……………」

「……お前が、この事件を起こしたのか……？」

訝しそくに、ケンが呟きます。「お前は……レイヤ、じゃないな。誰だ？」

「ふうん。さすがに君らは分かるんだ？ あのプリンセスたちは分からなかったけど」

「……あのバカが」

ミカドが吐き捨てました。「鏡に複製されたのか……失敗にもほどがある」

「自分自身が相手じゃ、勝つのは難しいだろうな」

察して、ケンがやれやれとため息をつきました。

二ヶ月前の調査の際、レイヤは一人で、それも、他の人間を護りながら、ここまでやってきたのです。それは並大抵の消耗ではなかったでしょう。

対して鏡によって複製されたもう一人は、オリジナルとまったく同じ能力を持っていながら、体力などはすべて万全な状態で生まれてくる。と、文献にはあります。それが本当のことならば、それでは勝負になりません。

「まあ、オリジナルも強かったけどね。疲れていたのが仇だったね。でも、複製に勝つのは難しいことじゃあないんだよ」

うつすら微笑みながらそう言った“レイヤ”は、くると突然三人に背を向け、すたすたと鏡に向かっていきました。真正面から。

“精霊のうつし鏡”に、少年の姿がやがて実物大となって映りました。鏡の能力が発揮される距離。そこまで彼が踏み込んだその瞬間、

鏡が強い光を放ちました。目をかばわなくては確実に失明しそうな強烈な刺激に、たまらず皆が目を閉じました。

次に目を開けた時。まさしく鏡から、第三の“レイヤ”が生まれようとしていました。磨きぬかれた銀色の表面に映し出されていたその姿が、するりとそこから抜け下ります。二次元の存在から、

三次元の存在へと。

離れたところから見ていた三人は、とっさに構えをとりました。

「……………」

生まれたばかりの“レイヤ”は、無言のまま視線をあげました。姿かたちは、やはりレイヤそのまま。けれど、表情がありません。それはまるで人形のようにです。

表情のないまま、その唇が何かを紡ぎ始めました。

問答無用の魔術の気配

しかし、

「難しくないんだよ。ほら」

一番間近にいた第二の“レイヤ”は、素早い動きで生まれたばかりの“レイヤ”の腕をつかんで引き寄せ、どこからか取り出した短剣でその胸を突き刺しました。

あるいはその短剣をひねったのかもしれませんが。人形のような“レイヤ”はあつという間に絶命し、霧となって消えました。

残りの三人は、呆然とその様を見つめていました。

「簡単なものだろう？」

何事もなかったかのように、鏡から離れながら“レイヤ”は言います。

「複製コピーが生まれることをあらかじめ分かってさえいれば、ね」

「……………そう言えばレイヤって、接近戦はあまり得意じゃなかったよなあ……………」

ぼんやりと、トモカズがもらしました。

魔術士が接近戦を得手としないことは、常識でもあります。詠唱が間に合わないからです。

「でもまあ、オリジナルはそれを知らなかったから僕に勝てなかったわけだけど。　ところで」

“レイヤ”は不敵に微笑みました。

「姫君たちにたどりつくために、何をすべきかはもう分かっているだろうね。挑戦してみるといい　僕は邪魔はしない」

「……何故だ」

「ここまで乗り込んできた君らに、敬意を表して」
ミカドの冷たい声に、ひょうひょうと答えます。

「あるいは、できるはずがないとタ力をくくって、と言ってもまあ構わないけど」

茶化してそんなことを言いますが、どうやら本当に頓着していないようです。

白い少年のそんな態度を訝りながらも、やるべきことは一つしかないことをミカドは分かっていました。

鏡に近づけば、複製コピーが生まれてしまいます。いくら簡単に倒せる相手とは言っても、無限に生まれる複製コピーをいちいち消していたのではらちがあきません。

剣を投げてみたところで、砕けるようなやわな鏡でもないはずで
す。となれば 遠距離から、あの鏡を砕けるほどの威力を持った
攻撃など……限られています。

「一つ、忠告してあげようか」

のんびりと“レイヤ”は言いました。「この鏡は極めて有能だからね。 炎だとか、そういう物理的なものを映し出すと、そのまま複製コピーしてしまうんだ。 気をつけたほうがいい」

つまりは……鏡に映らない魔術を。 かつ通用するものを。
使すべき魔術も、どうやら限られているようです。

「ミカド」

友人たちの呼びかけ。 ミカドは短く応えました。

「……時間がかかる」

うなずいて、二人はミカドから離れました。 彼の精神統一を邪魔
しないために。

鏡から離れないよう、けれど決して近づきすぎぬよう……距離を
測りながら、ケンとトモカズは壁づたいに動きます。
「待った」

ふいに、“レイヤ”が二人の目の前に現れました。

彼の移動術は、魔方陣を必要としません。一口に“移動術”と言ってもやり方は人それぞれであり、その業はレイヤの得手とするものでもありました。

一瞬、ケンは「こいつが本物だとしたら」と考えました。レイヤ本人が、瞬間移動により、ここにいるのだとしたら。けれどすぐ否定しました。いくらそれが彼の得手とは言え、フローディアからこの遺跡まではかなりの距離があります。頻繁にそんな距離を行き来すれば、かなりの消耗になるでしょう。

「どけよっ！」

トモカズがイライラしたように叫びます。余裕の態度の“レイヤ”は軽く腕を組んで、二人を眺めました。

「……彼の魔術が成立するまで、暇だろう？　少し楽しませてくれないんじゃないかな」

「何をしろって？」

“余裕の態度”はケンにとってもお得意でもありました。口元に微笑をたたえてそう返してやると、嬉しそうに“レイヤ”は続けました。

「僕はここところ、複製コピーしか見ていなくてね。“本物”ってやつが楽しいんだよ。だから」

言うなり。

『光、弾けし衝撃をもって』
カッ！！

爆発的に膨れ上がった光が、視界を真っ白に染めました。

じゅわっ、と何かが溶けるような音がして、気づいた時には、

「……おい……」

トモカズが呆然とうめきます。

狭かった道の両脇の壁が広くえぐりとられて結果、その場は広くなっていました。鏡の部分のみ、狭く奥まった状態のまま　つまり、鏡には真正面からしか近づけないままでその衝撃に、ミカドが詠唱を中断していました。いまいましそう

に“レイヤ”をいちべつしてから、再度やり直します。

ミカドのことは完全に無視して、“レイヤ”は満足そうに言いました。

「さあ、これで場所は確保できた」

ケンとトモカズは、身構えました。これから戦闘が始まるに違いないと、そう思ったのです。

けれど、それはわずかにはずれていました。白い少年の口から放たれた言葉は

「それでね、偽者のレイヤくんは調査隊の人がひとり人質にとられたらしくて　レイヤくん本人は、偽者を倒すための呪文の詠唱に入ってたんだって」

ミフユの父が語ったあの日の真実

「でも、詠唱に時間がかかったらしくて　そしたらその間に、偽者が調査隊のメンバーに言ったんだってさ。“それじゃあ”」

「それじゃあ、本物同士で戦ってくれるかな。もちろん分かっているね。プリンセスのことは、僕が一番知っているよ」

第10話 迫り来る危機

しん……

その一瞬、誰もが沈黙しました。

かすかに流れていたのは、“レイヤ”の言葉を聞いていても詠唱を中断しなかったミカドの、静やかな言の葉……

『それじゃあ、本物同士で戦ってくれるかな。もちろん分かっているね。プリンセスのことは、僕が一番知っているよ』

双子姫の命は、この複製少年^{コピー}に握られていることを。

たしかに認めて、ケンとトモカズはどちらからともなくため息をつきました。

それから、トモカズがにやりとして言いました。

「そーいや、お前とはスクール卒業して以来手合わせしてねえよなあ、ケン」

「そうだったかな。お前とやると危なっかしくて　オレは自分の身がかわいいんでね」

「安心しろよ。顔にだけは傷つけねーから」

「へえ？　お前もやつとでそういう最高の配慮をできるようになったのか？」

「あとでハルミに殺されたくないからな」

二人の口調は、いたってほがらかでした。まさしく友人同士の、日常会話的な調子でした。

そんな会話をしながら、二人は自身の剣を握り直しました……

「本気でやってくれよ。つまらないから」

広くなった場所の壁にもたれて、“レイヤ”がのんびりと言います。

「言われなくても」

「手加減できるほど……お互い弱くないからな」

向き合い、視線を交わし、そして。

カキン！

空気を震わす金属音

「この際だ！ スクール時代の決着つけてやらあ！」

「上等だな！ 怪我人の身でオレに勝てるか……！？」

叫びあう二人は、こんな状況だというのに心なしか楽しそうでもありました。

左腕を負傷したままでありながら、勢いの衰えないトモカズの力に任せた剣筋。どこまでも軽やかに慎重にその隙を狙うケンの冷静な剣筋……

ぶつかりあい、火花を散らすほどに。

「ふうん……」

それを眺めて、“レイヤ”はあごに指をかけました。

「けっこう、遠慮なしにやるんだね。決断までの早さといい、さすが非常識な君らしいというところかな」

混沌なる闇に、たゆたいし無限の力……

ミカドは詠唱を止めません。それどころか、剣を交え始めた友人たちに視線をやることさえありません。

“レイヤ”はミカドのそばまでのんびりやってくると、

「……あの分だと、時間がかかればどっちかが本気で倒れるんじゃないのかな。君には、それが分かるだろう？」

もって光と成し、もって生命と成し、もって世界と成し

「完全無視かい？ 薄情と言っべきかな。それとも」

もって、心と成し。心ありて、力、発現す

「それとも、賢いねと言っべきか……」

くっ、とのどの奥で笑い。

それきり、“レイヤ”も口を閉ざしました。

キーン、カツ、ガキンツ！

二人の戦士の交わす金属音……

ミカドの魔術の言の葉が、それに重なって。

邪気にあふれたその場の空気が、不気味に騒ぎ出そうとして

いました。

*

「やっぱり本物みたい……」

立ち上げられるようになったモミジ姫がまっさきにしたことは、それを確かめることでした。

「信じられない。それに、あの……レイヤくに似た人、もっと不思議なことを言ってたよね？」

「……『永遠に金を生み出せる』って……？」

モミジ姫より少し遅れて、立ち上げられるほど回復したカエデ姫が、妹姫の肩越しに金の山をのぞきました。

モミジ姫は、姉姫のほうに振り向きしました。

「どっ、どういう意味かなあ……？」

「分からない。でも、お父様たちが泣いて喜びそう……話なのは、たしかね……」

「そ、そうだよ。でも……」

国にとって喜ばしいこと。そんな話題なのに、モミジ姫の声はとも暗いものでした。

「……そんなの、まともな方法じゃないに決まってる……」

根拠などありませんでしたが、そんなにうまい話を頭から信じるほど、双子プリンススはお子様ではありません。

「とにかく、ここから出なきゃ、それができないなら、何とかこの場所がミカドたちに分かるように、」

抜け道をさがして、モミジ姫は密室を駆け回りました。

カエデ姫は金の山のそばにたたずんで、暗い表情のまま空気を感じていました。

「この感じ……邪気……？」

実はカエデ姫にも魔術士の才があることは、れっきとした魔術士であるミカドや、魔術士ではありませんが博識のミサオによって前から分かっています。

一国のプリンセスが魔術士などという忌み嫌われる職業にはつきませんが、カエデ姫は邪気を邪気として認識できる数少ない人間でした。

邪気は 魔力は、集まると常識では考えられない状態を簡単に作り出します。術士がいなくてもです。

察するに、ここが密室でありながら呼吸ができるのはそのためかもしれません。たとえば、密室に見えているのは魔力による視界のゆがみであり、本当は出入り口があるのかもしれない

「……ここから、出られる……？」

カエデ姫はつばをのみこみました。 魔術に関する知識だけは、豊富にもっていました。実践したことはありませんが。

うかつに手を出すことはできない けれど、他に打開策はあるでしょうか？

そう考えた時、姫は決心しました。

「カエデ？」

姉姫の様子の変化を敏感に感じ取り、モミジ姫が振り向きます。

「モミジ、こっちへ来て」

言われるままに、妹姫は姉姫のところまで近づきました。

「腕につかまっついて」

うなずき、ぎゅっと姉姫の腕にしがみつき

魔術とは、つまるところ魔力に“命令”をくだすことでした。それが詠唱です。詠唱内容は、人によりけりでしたが

カエデ姫には、深く言葉を考えている余裕はありませんでした。

お願い、私たちをつれて行って

この閉じられた空間から解放してと、強く念じ。

発動には、とても時間がかかりました。

カエデ姫の体を圧迫する何か。けれどその息苦しさが、逆に発動

している証だと、姉姫は確信して術を中断しませんでした。

だからこそ、姉姫は他のことには意識が回りませんでした。
そんな姉姫の腕にしがみついていたモミジ姫は、ふと頭上に目をやり　目を見開きました。

土の天井に、目玉がありました。そして口がありました。

大きなその口から、唾液のようなものが……今まさに垂れようとしていました。双子姫の、ちょうど頭上に！

カエデ姫の術が、完全に発動するのと、

「危ない！」

モミジ姫が姉姫を突き飛ばすのとは

くしくも、まったく同時に起きた出来事でした。

「モミ……！」

突き飛ばされながらも術の発動は止まらず、カエデ姫は地面にくずれようとすると姿勢のままその場から姿を消しました。最後まで呼びきれなかった妹姫の名が、空中に寂しく散ります。

「カエデ……！」

瞬間的な緊張によって、モミジ姫の体には汗がふき出していました。一瞬前まで姉姫がいた場所に垂れ落ちた“唾液”が地面に落ち、しゅうしゅうと不気味な煙を発していました。それを浴びた場所がみるみるうちにどす黒く変色していきます。

「毒……？」

ついその様に氣をとられ、呟いたその時、

びちゃっ……

「あ　」

首筋の生暖かい感触に、とっさに手をやって、モミジ姫は青ざめました。手のひらについてきたのは、しゅうしゅうと煙を発する粘ついた液体……

ぱつと天井を仰ぐと、目玉と口だけの“顔”はモミジ姫の真上へとわずかに場所を移動させていました。

にたりと笑うその唇

モミジ姫はその場から動けませんでした。

「　　」

足ががくがくと震え、全身から力が抜けました。

追い討ちをかけるように、地面に崩れた姫の体に二度三度と毒液が降り

肌から染み込む恐怖の毒が……姫の体を、あっという間にさいなんでゆきます。

ミカド……

意識が沈む最後の瞬間に、モミジ姫はその名を呼ぼうとしました。

苦しみのその呼び声は、ついに音とはならず……にじった空気にまじって、消えてゆきました。

第11話　そして……

突然、空気が大きく揺らぎました。

「!?」

その気配に、剣を交えていたケンとトモカズのみならず“レイヤ”までもが驚いたように、その原因へと視線をやり、そして「まさか……」と愕然として呟きます。

「カエデ！」

トモカズが叫びました。突然現れ、そのまま地面に倒れこんだプリンセスの片割れに、彼は駆け寄ろうとしました。が、

「近づくな！　まずい……！」

ケンの制止にハッとして足を止めます。

カエデ姫はまさしくあの鏡の前に倒れていて

彼女が倒れるその直前の姿を、鏡は映し取っていました。

カアッ！

レイヤの時と同じように、一瞬鏡は光を放ち、そして鏡からもう

一人のカエデ姫がするりと抜け出てきました。

「え……？」

ちょうど、本物の　と思われる　姫が地面から顔をあげ、も

う一人の自分に気づいて息をのみます。

二人目のカエデ姫は、人形のような表情のまま、足音も立てずにゆっくりと、鏡のほうへ近づこうとしていたトモカズに歩み寄ってきます。

「う……」

うめいて、トモカズは一步あとずさりました。偽者と　分かっている、たとえ人形のようにも、それはあまりに友でもあるプリンセスに似すぎていました。それに剣を向けるには、彼は情にあっすぎているのです。

偽プリンセスの整った唇が、何かを紡ごうとしています。先ほど

のレイヤと同じように

カエデ姫にも、魔術士の才能がある……！

そのことを思い出し、トモカズが全身を硬直させました。それと同時に

「どけ！」

彼の背後から、彼を横に突き飛ばしながら偽プリンスに肉薄したのは。

「……う、……」

二人目のカエデ姫が、無表情のままうめきました。

彼女の細い体を、ケンの刃が貫いていました。

「悪いな」

偽プリンスの耳元で、ケンは囁きました。「フェミニストってのは　オレの母の故郷では、“男女平等主義者”って意味なんだ」

そしてケンは、根元まで突き刺したその剣を抜き去りました。

一撃で絶命した偽プリンスは、地面に倒れるとともに霧となって消えてゆきます……

「……悪趣味だな」

ケンが、苦々しく吐き捨てました。それから鏡の目の前に倒れたままのカエデ姫に向かって、「そのまま這って鏡から離れて」と言いました。

言われて、カエデ姫は鏡の存在に気がついたようでした。這いつくばったまま鏡からがんばって離れると、ほうけていたトモカズがはつと我に返って、彼女を立ち上げらせにゆきます。

トモカズの手を借りながら、カエデ姫は呟きました。

「あの鏡は……」

「映ったモンを複製しやがるんだよ。まったく、趣味悪い……」

「……」

やがて姫は、少し離れた場所でまったく動かずに状況を眺めている白い少年に気づきました。彼に向かって、

「……あなたが言っていたのは、こういうことだったのね……」

「姉姫のほうは、少しは察しがいいみたいだね」

“レイヤ”はそれを返答としました。

「おい、何の話だ？」

「……私たちが、私とモミジがいた場所に……金の山があったわ」

カエデ姫はぽつりと呟きました。

「彼は、金を『永遠に生み出すことができる』と言ったの」

「……なるほど？」

ケンが、鏡に興味深げな視線を投げます。

「使い方次第では、国を救う財産つてわけか……」

「……お父様が聞いたら……喜ぶわ」

「そりゃあなー。うちの国ってなんだかんだでけっこう苦しいもん
な……」

トモカズが頭に手をやってため息をつきました。

彼らは、国ではかなり稼いでいるほうですが、悲しいかな貧富の
差が激しいのが小国フローディアの実情です。町に冒険者があふれ
ているのは……つまりは、まともに職にありつけないからなのです
から。

あの鏡は、とても物騒で趣味が悪いものです。

けれど、使い方次第では……。

「国王に認められるチャンス、か」

皮肉気に呟き、ケンは振り向きしました。

「ミカド、どうする？」

その刹那に、

今、理を解し我^{われ}力を欲す。すべてのものを無に帰^きせん
！

成立した言の葉が、あたりの邪気　魔力を動かし、
彼の命じに応えた力が、すべて鏡へと向かっていきました。
カシンッ！

鏡がひび割れました。その破片が飛び散りました。飛び散ったかけらが空中で次々と砕かれました。次々と

そして、やがて粉となり、煙となり……
完全なる“無”へと。

怒りを募らせた若き魔術士が、滅多にない荒ぶった声を吐き出しました。

「モミジはどうした……っ」

びくつと、カエデ姫が体を震わせました。同時にトモカズが切羽つまった声で異変を告げました。

「あの偽モンがいねえ……！」

つい数旬前までそこにいた、白の魔術士の姿

それを求めて辺りを見回すトモカズとは対照的に、

「あいつは放っておけ。それより今は」

冷静にそう答えたケンが、難しい顔をして一点を見つめていました。つい先ほどまで、鏡があつた場所を。

「道がない」

そこは、まっさらな土壁でした。

ミカドはその土壁をにらみやりました。彼の唇は、次の魔術を紡ぎ始めていました。

惑わせし偽り。すべて真なる姿へ

心なしか、リズムが乱暴となっていました。それに気づいたケンが、表情を険しくして彼に声をかけようと思いました。

「ミカド、お前」

ミカドはそれを無視しました。

魔術が発動し、空気がゆらめきました。少年たちは吐き気をもよおしました。が、それもわずかな間。

閉じられていた世界のどこかが崩れ、そして。

……何も無かった土壁に、道ができていました。

言葉を交わしあう必要もなく、全員が走り出しました。

そして、彼らがその場所にたどりついた時。

「モミジ？ モミジ！！」

迎えていた光景は、地面に倒れたプリンセスの姿。

ぴくりとも動かない姫の上に、ぴちゃぴちゃと垂れ落ちるしずくは……

「上だ！」

トモカズが叫びました。彼は力任せに、己の剣を天井に向かって投げつけました。

ドガッ！

天井に浮かんでいた顔の中心に刃は命中し、顔が消滅しました。垂れ落ちる唾液ごと。

しかし奇妙なモンスターを始末するだけした後、当然のことですが彼の剣は地に落ちてきました。モミジ姫の真上に！

「うわあっ！」

「バカかお前は！」

間一髪、ケンがトモカズの得物を剣で払い飛ばし、怒声をあげます。声も上げることができず凍り付いていたカエデ姫が、力がぬけたようにその場にへたりこみましたが

「モミジ！」

ミカドが横たわる姫に駆け寄ります。恋人たる娘に。

モミジ姫は真っ青になり、異常な汗をかいていました。その呼吸が細く定まらず、時々ひきつけを起こしたかのように全身が震えます。泥だらけになったその体に、さらに天井の魔物の毒の唾液の跡が多数残っていました。

「毒が……」

遅れて駆け寄ったケンとトモカズがのぞきこみ、青ざめました。二人とて、毒というものは見慣れています。姫の容態がどれほど悪いかは、一目見て分かります。

けれど、尋常でなかったのはむしろミカドのほうでした。

「ミカド！ おい、治療しねえと……！」

ファーマシスト

友人たちに言われるまでもなく、黒髪の薬師は迅速に解毒作業に

移っていました。

けれどその手つきのひとつひとつに……
にじみでる焦り。

治療するために触れる指先から、伝わってくるのは姫のか弱い生氣。じよじよに薄れていくもの

体の中に浸透した毒の中和には、解毒用薬水を直接飲ませる方法しか今はありません。

薬水の入った小さな筒の先を姫の口元に持っていていても、唇の端からこぼれるばかり。

少年は長い間考えることをしませんでした。

すぐさま自ら筒の中身をあおり　いえ、口に含み、直接姫の口へと……

けれども、

唇を触れた瞬間に強く感じた、姫の冷えた体温。

その瞬間に、彼の中で何かが壊れ。

「目を覚ませ！　モミジ……！」

ミカドは気が狂ったかのように姫の体を揺さぶりました。彼の顔から血の気がひいていました。それこそ彼自身が病人かのように。

「落ち着け！」

後ろからケンが、ミカドの肩をつかみ強く揺さぶりました。

「落ち着くんだ！　お前の得意分野だろう……！」

得意？

若き薬師の唇から、その言葉が漏れ出ます。手につかんだままだった薬水の入った竹筒。その手にふいに、力がこもり、

次の瞬間には、それを遠くに投げつけて。

「モミジイ……！」

響くのは、少年の絶叫

無理だ、もう間に合わない

有能な薬師であり、医者であるがために分かる限界。

あきらめるな、彼女はまだ生きている

目の前には、今にも生命の灯火が消えていきそうな恋人。ひゅーひゅーと、か細い呼吸の音……

自分に、何ができると？

瞬間、たえがたい苦痛を胸に感じ、少年は頭を抱えました。

彼の中で世界が一瞬の内に様変わりし、そこは暗い闇の中となりました。その中心に自分がいて、苦しむ恋人がいて、他に何もありません。友人たちの声さえ聞こえません。

ただ彼に聞こえていたのは 彼女の呼吸の音。自分の心臓の音。いえ……あるいは彼女の鼓動だったのでしょうか。重く乱れたその音が、世界を支配していました。

彼は、病院の息子として生まれ、そうして育ちました。

父とのいさかい。長年それを繰り返していたとは言え、決してその職業が嫌いではなかったのです。

いえ、むしろその逆……

だからこそ彼は、基礎となる薬師としての訓練を怠りませんでした。だからこそ……最大の敵である教会に、みずから入り込んだのです。

人間自身の治癒力を、信じる者。神の奇跡には頼らぬ者……

今、目の前に広がる光景は、自分が信じたものの限界

モミジ……

プリンセスでありながら、何に頓着するでもなく、人に避けられていた自分に明るく声をかけてきた娘。

姫であることなど、どうでもいいことでした。

ただ、彼女が、彼女であることが、彼にはとても大切なことでした。

そのかけがえのない命の火が……目の前で消え行こうとしているそれも、毒という苦痛によって。

しめつけられる心。むきだしになった少年の弱い部分が、悲鳴をあげていました。

「いやだ！ いやだ……」

「意地と誇りは、別物だ」

……ふいに聞こえてきたのは、自分を教会に受け入れた不可思議な老司教の声。

「いざとなったら」

教会に入ってから、「神の奇跡」は何度も目にしました。やすやすと行われる奇跡ではありませんでしたが、たしかに……それは不思議な、かけがえのない力でした
『お前も、すがってかまわないのだよ』

神に。

それは自分が信じてきたものに反するもの。自分が信じてきたものの意味を、無にするもの。

けれど……それを拒絶することが、どれほどの価値があることなのか。目の前に苦しむ大切な人がいる、この状況で。

すげばいい。

耳元で、囁く声がしました。

勘違いをするな。神とは何なのか

少年は、目を閉じました。

その両手が 胸の前で、組み合わせられました。

そしてその唇が、紡ぐ言葉は。

「……我が……神よ……聖なる母よ……」

今まで幾度となく、人間の吐き出す“邪気”に命令を下してきた、その声で。

もう、葛藤などどうでもいいことでした。

「天の光となりて我らを照らし……、大地のぬくもりとなりて我らを守るその偉大なる力」

思ふことはたった一つ。

ただ、救いたいと。

ミカドの祈りの言葉に、友人たちの声も重なり。
それは強い心となって……

彼らの祈りの声を、彼は聞いていました。

すでに密室ではなくなった部屋　祈る彼らからは死角となった
位置の壁に、彼はもたれていました。ゆえに彼自身からも彼らの姿
は見えませんでした

目を閉じてその旋律を聴きながら。彼は、呟きました。

「……ついにプライドを捨てたわけか……彼は」

「プライドなんかじゃないわ」

返ってきた言葉に、彼がはっと顔をあげた時

どすっ

「っ」

彼は体を震わせました。真正面から、体ごと自分にぶつかってきた娘。

そして自分の腹あたりから、鈍い痛みが広がっていきます

「な……あ、あなたが、」

「……ひどい人」

悲しげな姫君の瞳が、彼を見つめていました。全体重をかけて、
とらえた彼の体を逃すまいと。

姫の唇が、その問いを投げかけました。

あなたは、だれ？

「ぼ、く、は」

彼は、最後まで言葉を発することができませんでした。

あるいは……答など、持っていなかったのかもしれない

がくつと力が抜け、数秒たてば　白いローブをまとった少年の

姿は、チリとなって消えました。

カランカラン……

「……………」

カエデ姫は、地に取り落とした護身用の短剣を見下ろしました。
赤い血が……刀身を染めていました。

たしかに、肉を貫いた感触がありました。

たとえその最期が、人間とはかけ離れていても

「……………」

プリンスは両手に顔をうずめました。

彼女の耳に、友人たちが妹のために紡ぐ祈りの言葉が柔らかく流れこんできました。

モミジ……

かけがえのない妹姫のため。姉姫にできることは、ただ彼らとともに祈ることだけでした。

第11話 そして……（後書き）

次回、最終回です。なるべく早く更新できるよう頑張ります。

エピソード―物思いの終わり―

「第三遺跡、崩しちゃったんだってね？」

姿を現すなりそう言った白の魔術士に、ミカドは冷え切ったまなざしを送りました。

場所は王立図書館、管理人室　という名の、事実上ミサオの書斎。本だらけのそこで、ミカドはケンを巻きこみながら書類と格闘していました。

『あそこは珍しく図書館（うち）の管轄だったのよ。始末書は、もちろん書いてくれるのよね？』

淡々とミカドにそう告げた小柄な娘。ミサオは実は、仲良し組みの中で最強ではないかとひそかなうわさがあります。

双子姫を救うため、南第三遺跡にミカドたちが入ってから、すでに半月。

彼は洞窟を出る際、その入り口を魔術によって閉じました。早い話がぶち壊したのです。

遺跡は重要な国の財産です。それを崩壊させてしまったのですから

『ええもちろん、始末書さえ手伝ってくれるのならあとはどうにかするわ。一番面倒なのは始末書だもの。お城の連中に頭を下げるなんてこと、大したことじゃないわ。ええ、もちろんよ』

何てことをにつこりと言われた日には、さしものミカドも従うしかありません。

もつとも、今回遺跡が崩壊した事件のそもその発端はプリンセスの誘拐

少なからず城の警備の甘さに責任があると世間的には見られているため、実際にはそれほどお咎めを受ける予定はないのです。

「僕にも責任はあるよ。認める」

管理人室に現れたレイヤは、微笑みながら言いました。「僕の、

複製が起こした事件らしいね？ まったく、ひどい汚点だよ」

言いながら、本人はまったく気にした様子がありません。

ミカドは自分が書き連ねていた報告書に目を落としました。事件の原因。精霊のうつし鏡。それによって生まれた、第二のレイヤ「でも、良かったじゃないか。プリンセスも結局無事だったんだし。今回ばかりは、君らに負けたな」

「お前も、けっこう素直なところがあるんだな」

ミカドの傍らにいたケンが、ゆっくりと部屋を横切りドアのところにまで行くと、そこにもたれました。

「ライバルの実力を認められないようじゃプロじゃあない」

「なるほど？」

「何しろ僕は“公正な魔術士”だからね」

「……なら」

ミカドはレイヤを見つめました。半眼の黒い瞳で。

「正直に言うべきだな」

「何をだい？」

「とぼけ通せると思っているのか？」

俺たちの実力を認めているのなら

レイヤの言葉を逆手にとるミカドの視線に、レイヤもずっと目から表情を消しました。口元は笑みのままで。

「……どうして分かった？」

「演技が下手すぎたな」

ミカドは立ち上がりました。

「モミジたちの話では、あの複製は自身の名前を知らなかった。本当にあの鏡から生まれたならそれが当然だ。あの鏡は、記憶までも複製することができない」

記憶が複製できないからこそ

たとえ疲れきった人間を映しても、生まれてくるのは万全な存在なのです。“疲れている”という記憶までは、鏡は映せないのですから。

あの鏡が映しとるのは、純粹に姿と、その能力のみ。

「だがあの複製は、俺たちを知っていた」

言動の端々に見えた、その矛盾。

「そしてお前は、二ヶ月間かなりの消耗をしていた……」

そんなことが出来るもんなんだな、と部屋の戸口にもたれたケンが独り言のように呟きました。

「いくら魔術士でも、自分の分身なんて作れるものなのか……」

「高度中の高度な術だ。だが、不可能じゃない」

まさか完成させているとはな　言いながらミカドは、まぎれもなくこの国では随一の魔術士たる同級生を見つめました。さらに言葉が続けます。

「……ミフユの父親が、記憶を取り戻したそうだ。鏡から生まれた本当のお前の複製が挑発してきたときのことを」

調査隊のひとりを人質にとり、”本物同士で戦え”と挑発され。

「……お前は、すべて吹き飛ばしたそうだな。調査隊の人間ごと」
「忘れて欲しかったんだよ」

レイヤは何でもないことのように言いました。

「鏡から生まれてきた自分が面白いことを言い出すから　色々、試したいことが思いついてね。調査隊の連中には、”本物同士で戦う”なんてことはできなかったんだ。体が動かなかったんだろうな」

まああんな状況ではそれが当然かもしれない」

そんなことはどうでも良かった

レイヤは口元の笑みを消しません。消さないまま　囁きました。

「君がああ鏡をどうするか……興味深かったんだ」

ミカドは目を細めました。レイヤは続けました。

「まさかあんなに簡単に砕くとはね　後悔はしていないのかい？
あれを王に献上すれば、君はプリンセスとの仲を認められたかもしれない」

「戯言だな」

ミカドは吐き捨てました。「そんなことを試すために　二人を

さらったのか」

「それを含めて。 君たちは見ていて面白いからね」

くつくつと、心底おかしそうな笑い。笑みの形にほころんでいながら、その実ひどく皮肉気な光の宿る目を、ミカドに向けて。

「おかげで、最高に面白い場面が見られたよ。黒の聖職者さんダークプリーストによる祝福。あいにく、プリンセスの片割れに邪魔されて最後まで見られなかったけど……充分だね」

ガッ！

ミカドは机の上にあったカップを投げつけました。あっさりとかわされ、カップは向こう側にいたケンに受け止められました。

「おやおや、プライドを傷つけたかな？」

レイヤはどこまでも笑うだけでした。ミカドは彼に歩み寄り、その胸倉をつかみあげました。

「……そんなに、殺されたいか」

「物騒なせりふだな。プリンセスの恋人にしては」

「よくものこのことここまでやってきたものだな」

「本当に。ただのこのことやってきたなら、ただのバカだね」

余裕ぶったその態度に、ミカドが訝しげに眉根を寄せます。

この広くはない管理人室に、窓はありません。唯一の出入り口であるドアは、すでにケンが封じています。レイヤの得手とする移動術も、詠唱が必要です。それが発動する前にいくらでも邪魔ができます。つまり、彼に逃げ場はないのです。

「君らも、もう少し冷静に考えてみたら？」

レイヤはおかしそうに目を細めました。「ここに、君らといつも一緒にいる人物が一人いないこと。何も思わないのかい？」

「！」

トモカズ……！

「あいつを」

「とりあえず、手をはなしてくれないかな」

のんびりと言ったレイヤの言葉に、逡巡したミカドは やがて、

いまいましそうに手をはなしました。

乱れた胸元を整え、レイヤは動きがとれなくなったミカドとケンに向かつて一礼しました。

「ご心配なく。ここから逃がしてくれるなら彼には何もしいさ。ウソは言わない」

何と言ったって

「僕は、ホワイトウイザード“潔白な魔術士”だからね」

不適な微笑み一つ

詠唱が始まり、やがてレイヤは姿を消しました。

「くそっ……」

苦々しそうに、ケンが舌打ちしました。「トモカズは」

と。ふと聞こえてきた音に、首をかしげます。

バタバタバタ。“静粛”を第一条件とする図書館には似つかわしくない足音が、ドアの外、廊下から聞こえてきます。だんだん大きくなり……やがて、

バタンッ！

「おい二人とも！ ハルミのやつが陣中見舞いっつつてパン焼いてくれたぞっ！ っても何で俺が使いつ走りなのかいまいち納得できねーけど、とにかく昼にしょーぜっ！」

……

「……？ な、何だよ二人とも……？」

その場の空気にひるんだトモカズの前で、二人は呟きました。

「……はったりか」

「大した“潔白”もあつたもんだな……」

「な、なに？ 何の話？」

どことなくひきつった二人の友人の顔をかわるがわる見るトモカズは

そののち“何となく腹いせに”と二人にたっぷりいじめられてしまったそうです。どうやっていじめられたのかは、あえて語らないことにして

さらに半月が経ち。

国で一番大きい教会の裏庭で、ミカドは日光浴がてら本を読んでいました。ほどよく植えられた芝生に座り、大地の暖かさを感じながら。

第三遺跡に入ってから、彼は滅多に外に出なくなりました。教会に閉じこもり、人に会わずにただ一人で……

そんな彼を、ふいに訪れた人物がいました。

「ミカドッ！」

弾んだ明るい声。背後から飛んできたそれに、ミカドは幻聴かと思ひ、振り向きませんでした。

「ミカドってば！ 無視することないじゃない」

たたたと軽やかな足取りで近寄ってくる気配

まさか。

ようやく本から顔を上げたミカドの顔を、のぞきこむ少女。

「……何読んでるの？」

「」

仕立てのいい服に顔を隠す帽子。病み上がりの細い体から、元気を発散させる明るい笑顔。あまりに意外なその人物の出現に、ミカドはその名を呼ぶことさえできませんでした。

モミジ姫は、ふふつと楽しそうに笑いました。

「教会に来るって言えばね、お父様お城から出るのを許してくれたのよ」

本当は私の目的に気づいてたかもしれないけど　　といたずらっぽく舌を出し。

「でも、ミカドは私の命の恩人だって知ってるもの。少しは、許してくれるようになったんだから」

心底嬉しそうに。

それはミカドには、まぶしすぎる笑顔でした。

「……体の具合は……」

気まずくそれだけを問う彼に、「大丈夫」と姫は大きくうなずきます。

「ミカドの薬、よく効くよ」

「……………」

モミジ姫はすんと彼の隣に腰を下ろしました。そしてもう一度顔をのぞきこんできます。

彼は目をそらしました。それに気づいて、モミジ姫の表情がかけりました。

「……………どうして？」

「俺は……………」

ミカドは目を伏せました。

「……………お前を助けるために、神に祈ったんだ」

「……………」

「絶対に……………するつもりはないことだった。それをすれば医者としての自分がなくなる。それに、神の奇跡を信じきるつもりはなかった。なのに……………」

彼の心に、あの瞬間の葛藤が戻ってきていました。

そして、決心をした時の思いも。

「……………簡単に、神にすぎた……………」

ただ助けたかった。そのために、信じていたはず自分の技術ではなく、信じていなかったはずの奇跡に頼った。

その結果、奇跡はたしかに起きて、大切な人は甦った……………」

その時、ただ“嬉しい”と思った自分が、何よりも不安で。

「……………ダークフリーストあいまいな聖職者”、か……………」

自嘲気味に、その呼び名を呟きます。

思えば自ら魔術士の道を選び取ったのも 医者であり、僧侶である自分の葛藤から逃げるため……………だったのかもしれない。

そう、そんな自分を、彼は知っているのです。

「ぴったりだな……俺には」

「ミカド」

急に、モミジ姫が強く彼の名を呼びました。

はっと彼女を見た彼に、姫はにっこりと微笑みかけて、持っていた小袋から何かを取り出しました。

「今日は、これを渡しに来たの」

「それは」

ミカドは目を見張りました。

姫が大事そうに彼に見せたのは、一本の薬草でした。「十薬」

ドクダミです。中心に咲く黄色く細かい花弁を包むように、白い四枚の片が十字の形についています。長い茎に、緑色の葉。根っこまでちゃんと掘り起こしたようです。

その名の通りたくさん効能がある優れた薬草ですが、独特の悪臭があるためある時代に排除され、現在この国では見られなくなっていました。

かつてこの国には、数々の草花が咲き乱れていました。

フローディア
「香りの国」

それらのほとんどが薬草であった時代を思い出させる、懐かしい
白い色

「お城のね、裏に……まだ残ってたの」

頬を紅潮させながら、姫は言いました。「これを採るために……
いっぱい皆に迷惑かけちゃったけど」

でも 風のようにやさしく、彼女の言葉は続きました。

「どうしてもミカドに見せたかったの。あなたはお城には来られないから……わ、私はね。私は」

少し恥ずかしそうに目を伏せてから、次には目いっぱい笑顔を見せて。

「私は、薬草とかの研究してるあなたが大好き。人間の力信じるって言ってたあなたが大好き。その力を補助するのが医者なんだって言ってたあなたが」

大好き、と満足そうに。

「モミジ　しかし、俺は」

それを裏切ったのではないか。

かげる彼の視線に、モミジ姫は大きく首を横に振りました。

「あなたは何も裏切ってないし、何も失ってない。たしかに神様の力はすごいよ。神様に頼ってたらお医者様いらないのかもしれないでもね」

と、ドクダミをミカドに手渡してから元気よく立ち上がり、青空を仰いで。

「人が祈らなかつたら。思いをこめて祈らなかつたら神様には声が届かないんだって！　ねえ、それだけの思いを飛ばせるなんて充分すごい力よね……？」

勘違いするな、神の力を

それは、人の思いに他ならないのだから……

「……」

ミカドは手のひらにあるドクダミの感触を確かめました。

その口元が、かすかに微笑んでいました。

やがて彼は立ち上がり、

「モミジ」

呼びかけに振り向いた最愛の娘に、そっと口づけました。

一瞬で赤くなるプリンセス。彼女の肩を抱いて、少年は空を仰ぎました。

何も、不安がることはない……

自分が何より知っているのです。人間は、“奇跡”を起こすことができることを。誰より彼こそが、そう信じていたのですから

これは小さな国のお話。

事件は解決しましたが、ミカドにレイヤ、若き二人の魔術士の確執は、まだまだこれからも続きそうです。

けれどもそれはまた別の話。今宵は若い恋人たちの幸福を祈りながら、幕を閉じることになりました……

<光、願いし者ノ了>

エピソード物思いの終わり（後書き）

ここまで読んでくださって、ありがとうございました！

一応説明を含めた後書きをつけますので、よろしければそちらもごらんください。

光、願いし者 後書き

ここまで読んでくださってありがとうございます。

後書きを書くのはあまり好きではないのですが、多少の説明がいるかと思い、書くことにします。

正式タイトル

『光、願いし者』The light believer』

このお話は、友人の現代学園もののキャラクターをファンタジー舞台へ無理やりもってきたものです（友人の許可は取っております）元々友人がこのキャラたちを書き始めた頃、私は1番目の読者だったので、読者の頃から考えればこのキャラたちは10年ほどの付き合い合いとなります。

ファンタジー小説に置き換え、実際に書いたのは、5年前です。（古くてすみません）

個性的な8人（本来レイヤではなくミフユがメインメンバーでした）を書くために書き始めたものでしたが……

なぜレイヤがあんなに目だっているのかな？（にこっ）と自分に言いたい感じの出来になりました。（構成とか一切考えずに、思った通りに書いたもので）

そもそも書き始めが、部活の合宿先で貧血で1人ぶっ倒れ、皆がない部屋でメモに書き殴って始まったというどうしようもない裏話があります。

まあ友人本人にはレイヤがポイント高かったようなので……いいのですが……（いいのだろうか）

1話1話をもっと短くできればよかったかと、携帯で見てらっしゃ

る方を思っ て思いました。

ご意見感想、よろしければただけると嬉しいです。

本当にありがとうございます。また別の話でお会いできますよう。
（ひそかに「こんな話がいい」というリクエストを受け付けております。えっちっぱいのもBLも書けますので・笑）

07年10月19日 カサギユメト 拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8087c/>

光、願いし者

2010年10月8日15時03分発行